

「原点回帰」

服部喜望教会 山下 大喜



これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家に座っているときも道歩くときも、寝るときも起きるときも、これを彼らに語りなさい。 申命記6・7

教会学校に通う子ども達や地域の子ども達への伝道と自分の子ども達への信仰継承の為に日々奮闘しています。さまざま環境下に置かれている子ども達にどのように伝道すればいいのか上記のみ言葉から改めて教えられました。

「子どもたちによく教え込みなさい」と主から命じられている親や大人が、み言葉をよく学んでいるか、み言葉に生きているかが先ず、主の御前に問われています。

クリスマスチャン家庭に信仰の雰囲気がいっしょかりとあるのか。親や大人が「座っているときも道があるときも、寝るときも起きるときも…」主の教えを喜びとして思い巡らし、それに生きよ

うと主を見上げて生きているのか。子ども伝道はここからがスタートだと確信しています。

自戒を込めてですが、キリストの愛に真実に生きているならば、子ども達は大人たちに対して、心を開いてみ言葉に聴くでしょう。またその大人の背中を見て、子ども達はキリストを目撃するのです。子ども伝道には聖書を子ども達によく教える理論的な面と、生き様によって伝える非言語的な面があります。生活全般も子ども達への伝道において大変重要な要素です。

親や大人がキリストに従うよりも、この世の事に時間や労力を費やしていれば、子ども達が真似するのは当然のことです。

もう既にモーセの時代に、主は子ども伝道の秘訣を教えておられました。原点回帰を忘れず、み言葉に立って普段の生活全般を送ってまいりましょう。主は教会に託された子ども達一人ひとりに偉大な計画をお持ちです。主の目的を成し遂げる為、またこの罪の世界に主の栄光を現わすために、子ども達が教会に与えられているのです。改めて、先ず大人がみ言葉をよく学び、聖霊の助けによってそれに生きてまいりましょう。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
イスラエルの指導者	3
キリストの譬話	15
クリスマス	24
年末	31
牧羊ひろば (熊本真愛教会)	87
カリキュラム	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	94
おわりに	94

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシヤ語は〔B〕、ヘブル語は〔C〕、アラム語は〔D〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
 こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
 団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
 版局）、イン：「教会学校さんびか」、イン新：「教会学校さんびか 新版」（以上、
 インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこ
 どもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW：
 「プレイズワールド」（リビンクプレイズ）

聖書 士師6・7〜16

タイトル ギデオンの召命

暗唱聖句 力ある勇士よ、【主】があなたとともにおられる。

目 標 どんな人をも働きに用いようとしてくださる神の招きにお応えする。

士師6・12

導入

(和田牧子)

皆さんは「そ、それはわたしにはムリ〜」と思うようなことはありませんか？ 自信がないのにリレーの選手に選ばれてしまったとか、クラス委員長にすいせんされたりとか。「ぼくなんて、わたしなんて…」と簡単に断ってしまったり、あきらめたりすることがあるかもしれません。今日出てくるギデオンさんも自信がない、どちらかというと弱虫さんだったようですよ。

ミディアン人が攻めて来た!

今日の聖書箇所は「士師記」です。士師というのには「さばきつかさ」と言って、人々を助け治めるために神さまが選ばれたリーダーたちです。12人の士師のうち5番目に立てられたのがギデオンでした。

当時外国のミディアン人の力がとても強くなり、イスラエル人をおそったり、攻めたりしました。いのちをつなぐ食べ物も羊やろばなどの大切な家畜も、イスラエルには何も残らないほどでした。なんとむごいことでしょう。ミディアン人のいきおいはいなくこの大群のよう、彼らがのつてくるらくだは数えきれないほどでした。イスラエルはどんどん荒れ果ててしまいました。

イスラエルの人々は安心して生活できるおうちも、最低限度の食べ物もうばわれ、あまりにも苦しくて、神さまに叫び求めました!

ギデオンへの呼びかけ

そんなある日のことです。神さまの使いがあらわれ、ヨアシユ家にある櫨かしの木の下にすわりました。ヨアシユの子ギデオンは、ぶどうの踏み場である岩あなの中で小麦を打っていました。ギデオンはミディアン人のことがこわくてそんなところにかくれていたのです。

神さまの使いは言いました。「力ある勇士よ、主があなたとともにおられる。」勇士ってどういう意味でしょう? 「勇気のある人」という意味なのです。え? ギデオンはこそこそビクビク岩あなにかくれていたのに、

神さまは「勇気ある人」とお声をかけられたのです。何だか反対な気がしませんか？ ギデオンもおどろいてみ使いにこたえました。「ああ主よ。もし主がわたしたちとともにおられるなら、なぜこんなことがおこったのですか？ 神さまはわたしたちイスラエル人を見ずして、ミディアン人の手にわたされたのではないですか!？」

しかし神さまは彼のほうをむいて言われました。「行け、あなたのその力で。あなたはイスラエルをミディアン人から救うのだ。わたしがあなたを遣わすのではないか。」ギデオンは神さまからこんなもつたない励ましの言葉をいただきながらも、まだしぶとく抵抗します。「ああ、主よ。どうしてわたしはイスラエルを救うことができるでしょうか。ごぞんじのように私の家はマナセ族の中でも一番弱く、そして私は父の家で一番若いのです。」それに対して神さまは「わたしはあなたとともにいる。あなたは一人を討つようにミディアン人を討つ」と、ふたたび励まされたのです。

弱くても強い!

イスラエルの国全体をミディアン人から救うにはあまりに弱く、「だいじょうぶかなあ」と心配になるような

ギデオンを神さまは選んで、リーダーにお立てになりました。ふしぎですね。でもポイントは「わたしはあなたとともにいる」というところなのです。

「ぼくにまかせて。りっぱにやってみせる!!」「わたしならだいじょうぶ。自信があるんだ」という自信まんまんの人よりむしろ、弱く小さく、とるに足らない者ですと、思っている人を、神さまはえらび、お用いになるのです。なぜでしょう。人は自分の弱さを知っていると、「神さま助けてください」と祈り、神さまの力を求めます。そんな人にこそ神さまの力が自由自在にはたらかれて、神さまのわざが進んでいくのです。このあと、ギデオンは神さまの力をいただき、一つひとつ神さまにお聞きしながら、イスラエルのリーダーとして成長していき、危険で大変なこともいっぱいありましたが、神さまの霊にみたされてすすむことができたのです。

結び

皆さんもどうか、自信がないとき、弱さを感じるときはもちろん、どんなときでも、神さまに祈りたよりながら、勇気をいただいてチャレンジしていきましょう。

♪主がついてれば♪(イン10、イン新13、PW12)

聖書 士師6・7・16 テーマ ギデオンの名命

序論

(高橋頼男)

イスラエルがカナンに進入してから王制が出来るまでの約二百年間が士師記の時代です。当時、各部族はゆるやかな連合制の中でそれぞれ独立したあり方を取っていたため、強力な外敵の攻撃に対しては弱く、しばしば侵略を受けました。それは彼らが偶像礼拝を行って靈的に墮落したときに起こりました。圧迫された民が神に叫び求めた時、神は「士師」と呼ばれる解放者を起こし、イスラエルを救い出されました。士師記に登場する十二人の士師の中で、ギデオンは五番目の士師です。

当時、イスラエルを圧迫したのはミディアン人とアマレク人でした。遊牧民である彼らは、毎年収穫の時期になると、いなごの大群のように大挙してイスラエルを襲い、地の産物を根こそぎ奪っていきましました。そんなことが七年も続き、全く疲弊して弱ってしまつたイスラエルの民はこらえきれず主に叫び求めます。そんな状況の中で神が救済者、解放者として選ばれたのがギデオンです。

一、臆病者の士師(11～13)

主の使が来てヨアシの子ギデオンに呼びかけられた時、彼はミディアン人の目を避けて酒ぶねの中で麦を打っていました。主の使は「力ある勇士よ、[主]があなたとともにおられる」と言いましたが、この言葉は、ギデオンにとつては何か悪い冗談か皮肉のように聞こえました。彼は、自分はマナセの内では一番小さい氏族であり、自分も弱く父の家でも若いものであることを、くどくどと言っています。そんな自分がなぜ「勇士」と呼ばれ、へ行け、あなたのその力で。あなたはイスラエルをミディアン人の手から救うのだ。」と言われるのか、彼は本当にとまどってしまいました。

二、臆病者を用いられる神(14)

しかし、このように全く臆病で消極的な人であったギデオンを、主の使いはあくまでも「力ある勇士」と呼びます。神の戦いは神の方法でなされ、神はご自身の栄光が現される方法を用いられます。神は、自信満々の人間、知恵と能力のある者や、自分の力を誇る者を用いられることはありません。むしろ、弱く、小さく、取るに足らない者をあえて選び、召し、用いられるお方です。「権力

によらず、能力によらず、わたしの霊によつて」(ゼカリヤ4・6)。弱く、小さく、力のない臆病者のギデオンこそ、イスラエルを救うための神の選びの器でした(1コリント1・26〜31参照)。

私たちも、強気の言葉や態度とはうらはらに、本当の自分の姿を見せられ、無力感や不信、自己の醜さに打ちめされることがあります。日本の教会もまことに小さく、力の無いものであることを思われます。異教や異端ばかりが跋扈し、この世の勢力や組織がすべてを支配しているかのような現実から、キリスト教会は隠れて存在し、かろうじて日々の生活と働きを継続しているように感じてしまうのです。私たちの祈りも信仰も臆病なものになっていないでしょうか。何か言われると、自分に能力がないこと、小さく弱いことを言い訳にしないでしようか。しかし、いつもそこに留まって、神のお言葉と召しに従わないことこそ、私たちの最大の問題なのです。今一度、本気で主を求め、全面降伏・全面信頼し、上からの新しい注ぎを受けるべきではないでしょうか。

三、臆病者を大勇士に変える神(14〜16)

ギデオンを選び、救済者として召された神は、臆病者

を大勇士に変える力を持つておられます。主が選び、召し、共にいてくださり、つかわしてくださるのです。(わたしはあなたとともにいる) (わたしがあなただを遣わす) と主は繰り返し語られます。もし、そうならば、これに勝る力、勇氣、祝福はありません。

「あなたはヨハネの子シモンです。あなたはケファ(言い換えれば、ペテロ)と呼ばれます」(ヨハネ1・42)。直情的で不安定、欠点の多いシモンにイエスは目を留め、そのようなあなたをわたしは「ペテロ」(不動の大岩)とすると言われました。生まれつきのシモンと、後の大使徒ペテロとのギャップはとても大きなものです。しかし、その狭間を埋めて実質を持つ「ペテロ」としてくださるのは、イエス様なのです。

私たちも今日、主が共におられるという事実を受け入れ、主が、弱く臆しやしい私たちを造り変えて下さることを信じ、臆病者から勇士に変えられましょう。

結論

弱いところを強くされ、疑いを確信に変えて頂きましょう。大胆な信仰に立つて神に従い、神の方法によつて圧倒的多数に対しても完全に勝利する者とされましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキストト

7 ミディアン人 アブラハムとケトラとの間に生まれ
た第4子(創世記25・2)。その後、この民族は聖書に度々
登場するが(創世記37・25)、民数記22、25章)、一旦は
モーセに滅ぼされる(民数記31・1〜20)。ミディアン人
の最大の特徴は、彼らのバアル礼拝である。

8 預言者 (ハ)イーシュ・ナーヴィイ) 直訳すると「預
言者であるひとりの男性(人間)」。士師(さばきづかさ)
の時代に預言者が登場することは珍しいことであり、士
師記においてはイスラエルが主に呼ばわると、その時点
で士師が遣わされる(3・9、15)。しかしここではその
前段階として預言者が遣わされる。この預言者の任務は
イスラエルの民にその罪を示すことと、彼らに悔い改め
を命じることであった(10)。

11 [主]の使い この言葉は、旧約の神顕現けんげんの重要な個
所によく用いられている言葉である(創世記16・7以下、
22・11、15、出エジプト3・2、民数記22・22、1列王
19・7、イザヤ37・36、ゼカリヤ1・11〜12他)。また士

師記においてもこの言葉はしばしば登場する(2・4、
5・23、13章)。もちろんギデオンの物語だけでもしばし
ばみられる(11、12、21、22節)。これらの個所を見ると、
この主の使いは神と人間の間を仲介する役割を果たして
いるのであろうと考えられるが、それが預言者的な役割
であったか、それとも祭司的な役割であったか明らかで
はない。この、主の使いについて、受肉前のイエス・キ
リストであると考ええる立場もある。ギデオンはこの使
を、はじめ普通の人ととらえたが、この使いが見えなく
なつてから、この方が主の使いであることを知った(21、
22)。**アビエゼル人** ヨアシユ アビエゼル人とは、マナ
セの一族(15節。またヨシユア17・2参照)。アビエゼ
ルとは「父(神)は助けである」という意味である。ま
たヨアシユは「ヤールウエは与えたもう」という意味であ
る。**オフラ** エスドラエロン平原の中部に位置する。**樫**
の木 伝統的に聖なる木であるとされ、神の託宣が与え
られるとされる木であった(創世記18・1以下)。このと
き、ヨアシユの子ギデオンは、ぶどうの踏み場で小麦を
打っていた。ミディアン人から隠れるためであった。ミ
ディアン人は、イスラエル人が苦勞して栽培・収穫した

農作物を狙って、その収穫期にイスラエルを襲った。そのミディアン人の侵略から逃れるために、ギデオンはぶどうの踏み場で小麦を打っていたようである。葡萄の踏み場とは、岩床に掘り起こされた穴で、ギデオンはその穴の中に隠れていた。

12 力ある勇士 (ハ)ギッボール・ハイル) ギッボールもハイルとともに「勇者」という意味。そこで、「力ある勇士」となったのであろう。【主】があなたとともにおられる。主の臨在の約束。ヨシユアにも(ヨシユア1:5、9)、またアサ王にも(Ⅱ歴代15:2) 臨んだ。

13 前節の主の使いの言葉に対するギデオンの反応は、当然のことのように思われる。主は彼らを見捨てたのではないか、また主の力あるわざは昔のものであって、現在のことではないのではないかという不満である。この不満は明らかに同時代の人々も抱いていた不満である。

14 あなたのその力 主は「わたしの力」とはおっしゃらず、「わたしが与えた」あなたのその力」と仰せになった。主の力は既にギデオンに与えられていたのである。その上で、主はギデオンを遣わそうとされたのである。

同時に前節のギデオンの問いに対して主は **あなたは：救うのだ。わたしがあなたを遣わすのではないか** と語られた。前節の問いを解く鍵はギデオンにあるのである。同時にこの言葉は主の召命の確認の言葉でもある。

15 自分の家の地位の低さや年齢の若さなどによって主の申し出を断る姿はモーセ(出エジプト3:11、4:10)、サウル(1サムエル9:21)、エレミヤ(エレミヤ1:6)にも見られる。

16 わたしはあなたとともにいる 12節の主の臨在の約束の再確認。この言葉は、14節の言葉と共に、主が「派遣の主」であると同時に「臨在の主」であることをも表す。この言葉はマタイ28:18〜20にも約束されている言葉であり、古今東西を問わず主の弟子たちに与えられている、これ以上ない約束である。

参考図書 アーサー・E・カンダル、レオン・モリス共著「ティンデル聖書注解 士師記、ルツ記」(いのちのこ とば社) 他

聖書 士師16・4〜6、15〜22

タイトル サムソン

暗唱聖句 私は母の胎にいるときから神に献げられたナジル人だからだ。 士師16・17

目標 罪から聖別されて、力強い信仰者生涯を送る。

導入

(和田牧子)

皆さん「士師」っていうことば、聞いたことありますか？ 動物の獅子、ライオンさんのことではありませんよ。士師とはイスラエルの国のお仕事の一つで「さばきつかさ」のことです。今日の主人公サムソンは士師の一人で、ものすごく力の強い人でした。皆さんの中には、もうの強い人はいますか？ でも、サムソンには負けてしまうかも!?

ナジルびと、サムソン

サムソンはナジルびとの士師でした。ナジルびとは、神さまによつてきよく生きるように選ばれた人のことです。生まれた時から神さまにささげられたサムソンは、み使いに命じられ、一切ぶどう酒を飲まず、髪の毛

をそり落とすことをしませんでした。ですから、とっても長い髪の毛の持ち主だったのです。その髪の毛は、神さまがサムソンに大きな力を与えられたしるしでもありました。

この力のおかげでサムソンは、ロバのあごの骨をひとつ使って、ペリシテ人千人をたおしたほどです。それから真夜中にむっくりと起き上がり、町の門のとびらと二本の柱を引っこ抜いてかつぎ、高い山の上まで運んだほどでした。ものすごい力ですね！

ばらしちゃダメなのに…

あるとき、サムソンはデリラという女性に恋をしました。それを知ったペリシテ人たちは、何とかしてサムソンの弱みを知りたいと思っていたので、デリラに言いました。「サムソンに聞きなさい。どうすれば彼に勝てるんだい？ 彼をしぼって、苦しめることができるんだい？ 教えてくれたら、私たちはそれぞれあなたに銀千枚ずつをあげましょう。」この時のペリシテ人は5人だったようです。銀千枚×5人とはだいたい250万円から300万円ぐらいでした。お金に目がくらんだデリラは、サムソンにたずねました。「どうか私に教えてください。

あなたの強い力はどこにあるの？」デリラはサムソンに
しつこく聞きました。サムソンはうまくごまかして、三
回までは本当のことを言いませんでした。しかしデリラ
から毎日毎日責められるので、サムソンは死にたいと思
うほどつらくなりました。ついに根負けして、デリラに
秘密をばらしてしまったのです。「私の頭には、かみそ
りをあてられたことがない。私は母のお腹にいたときか
ら神にさざげられたナジルびとだからだ。もし髪の毛が
そりおとされたら、私の力は去ってしまい、弱くなって
普通の人になってしまうだろう。」

悔い改めたサムソン

さあ、たいへん！ デリラの知らせを受けたペリシテ
人たちはサムソンをつかまえにやってきました。デリラ
はサムソンをぐつすり眠らせ、人をよんで髪の毛をそら
せてしまったのです。いよいよペリシテ人がおそつてき
たときサムソンは「なあに、今度もいつものようにたお
してやる！」と自信満々でした。サムソンは神さまとの
約束をやぶつたために、神さまの力がはなれてしまった
ことを知らなかつたのです。ペリシテ人はサムソンをつ
かまえ、その両目をさぐり出しました。こわいですね。

サムソンはろうやの中でくさりにつながれ、臼うすをひくこ
とになってしまいました。そのろうやの中でサムソン
は、心から神さまにおわびしたことでしょう。せつかく
すばらしい力を与えられていたのに、神様から心がはな
れていました。きよく歩むよりも、デリラの誘惑に負け
てしまいました。そしてサムソンの力の秘密を話してし
まいました。

そんなサムソンに、神さまはもう一度力を注いでくだ
さいました。髪の毛がだんだんと伸びていったのです。
ペリシテ人のお祭りに引きだされたサムソンは、神じんでん
の柱をかかえて、力をこめて押ししました。すると神じんでん
はグラグラ、ドーン!!とくずれ落ち、その下じきでたくさ
んの敵がたおれ、サムソンもまた死んでいったのでした。

結び

皆さんは「サムソンのように強くないよ」と思うかも
しれませんが、イエスさまの十字架と復活によって救わ
れた人は、どんなに弱くても、イエスさまによって強い
のです。皆さんが持っている信仰と力を、神さまと人
お役に立てるよう、ささげていきましょう！

♪ 気持ちが暗くなったら♪ (イン78、イン新95)

聖書 士師16・4〜6、15〜22 テーマ サムソン

序論

(石田高保)

反面教師とか他山の石という言葉がありますが、サムソンはさしずめクリスチャンにとつてそういう存在でしょう。彼の生きた時代、イスラエルはペリシテの侵略を受けましたが、それに対してほとんど抵抗を示さず、その支配を甘んじて受けていました。そこで神様はペリシテに断固抵抗する指導者を起こそうとされます。サムソンの生まれる前、両親に主の使が現れ、生まれる子はペリシテからイスラエルを救い出す者となると宣告しました(13・5)。やがて成長して、彼に主の霊が降り、並はずれた力でペリシテ人を圧迫するようになり、20年にわたってイスラエルのさばきびと・士師として活躍しました(31)。

一、力わざによる失敗

彼の前半生は、まさに怖いものなしでした。主の霊が臨み、並はずれた力を授かりました。彼はそれをペリシテ人を一人でも多く殺害することに用いました。

ある時からサムソンはデリラというペリシテの女に熱を上げてその家に入り浸っていました。それを知ったペリシテの君たちは高額の報酬を提示してデリラからサムソンの弱点を聞き出そうとします。サムソンは三度も煙に巻こうとしましたが、せがまれるうちに根負けし、ついに本当のことをしゃべってしまいました。(へもし私の髪の毛が剃り落とされたら、私の力は私から去り、私は弱くなって普通の人のようになるだろう)。というのも彼はナジル人として生涯髪の毛をそらないという誓願を立てていたからです。そこでデリラは人を呼んでサムソンの髪の毛を剃り落とさせたところ、神の霊による怪力は去ってしまいます。情に負けてわが身に破滅を招きました。

さて、主を受け入れた人は誰でも聖霊の賜物をいただいております。優劣はありませんが、それは神と人によりよく仕えるために用いられるべきものです。得意な奉仕の分野だからといって自分を喜ばせようとして、力任せに行うなら、周りの人との関係を損なったり、後味の悪いものになったりするかもしれません。自分の能力や知識に頼るのではなく、聖霊に満たされることを求めつつ、謙遜に奉仕したいものです。

二、悔い改めと回復

ついにサムソンはペリシテの手に陥り、両眼をえぐられ、獄屋の中でうすを引かされる羽目になります。彼の生涯で初めて経験する挫折です。サムソンは人生のどん底で考えました。なぜここまで落ちてしまったのか、自分の何がいけなかったのかと。ほんとうの原因は突きつめれば神様との関係をなおざりにしていたことに思い至ります。そこで彼は深く悔い改め、神様との関係を回復したのだと思われず。

時を同じくして髪の毛も再び伸び始め、かつての千人力が全身にみなぎるのを感じました。反攻反転のときが訪れたのです。折しもダゴンの祭りで大勢のペリシテ人の前へ余興に出されたサムソンは、彼らを倒す好機と見て祈ります。(ああ神よ、どうか、もう一度だけ私を強めてください。私の二つの目のために、一度にペリシテ人に復讐したいのです)。そして両手で石柱を押し倒すと神殿は崩壊し、ついに三千人のペリシテ人を道連れにして果てます。(サムソンが死ぬときに殺した者は、彼が生きている間に殺した者よりも多かった)と、その士師としての功績がたたえられています。

彼の生涯には神様への不従順が目につきますが、またものを刈り取る中で不従順を悔い改め、神様との交わりを回復しています。このようにどれほど行状が芳しくなくても、ひとたび悔い改めるならば、神様はただちに100パーセント赦し^{ゆる}、何事もなかった者にして下さいます。ひどい罪を犯してしまったので、神様に赦していただけないと思うことがあっても、十字架による完全な赦しを信じて悔い改めればよいのです。神様が赦して下さった自分を赦すことも忘れないようにしたいものです。

彼はおおむね神様に不従順な人生を送ったにもかかわらず、新約聖書では信仰の勇者としてたたえられています(ヘブル11・32)。新約の倫理観から見れば、彼の生き方には理解に苦しむところが少なくありません。それでも彼はイスラエルを侵略者から救い始めた英雄であり、神に選ばれた器であることには違いありません。

結論

何度同じ過ちを犯したからといって神の選びは変わらず、神様に見捨てられることもなく、赦しの道は常に用意されています。しかしそれに甘んじることなく、神様とのコミュニケーションを大切にしてゆきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキストト

4～5 デリラ 「思わせぶりをする」という意味の名。ペリシテ人であった。しかし、この名の由来だけを見てデリラに対する偏見を抱くのは早計である。なぜなら今回のサムソンとデリラの物語の背後には、当時その地方に勢力を持っていたペリシテの領主たちの策略があったからである(後述)。**ペリシテ人の領主たち** ペリシテ人には5人の領主がいた(Ⅰサムエル6・4)と考えられるから、ここでも5人いたのであろう。すると、デリラへの報酬としてのおの銀一〇〇枚とすると、全部で五五〇〇枚ということになる。この額を今日の貨幣価値に換算すると、注解者によって多少の幅はあるもの、おおよそ250～300万円くらいの額とされている。かなりの高額である。**口説いて** 「言いくるめて」(新共同訳)。この言葉にペリシテ人の領主たちの策略がうかがえる。

15～22 サムソンがその力の秘密を打ち明けた経緯が記されている。

15 **あなたの心は私にはない** これまでのデリラの言葉

(10、13)とは明らかに異なる言葉。デリラの焦りと怒りが透けて見える。**三度も** 一度目(7～9)、二度目(10～12)、三度目(13～14)。

16 **毎日** どのくらいの日数が経過したかは明らかではないが、かなりの日数が経過したと考えられる。その間、毎日前節の殺し文句をもって責め立てられたサムソンは、死ぬほど悩んだ。

17 ここに人間の弱さを見ることができると。サムソンは既に同じ過ちをティムナの女の一件でもしていた(士師14・16～18)。この時も、サムソンは思わずその秘密打ち明けてしまったのである。前の過ちを繰り返さないように注意していても、同じ過ちを繰り返してしまったのである。**ナジル人** 「聖別された者」という意味を持つ。イスラエル人の中で、特別な宗教儀式(誓願)を守って献身し、ヤハウエに対する信仰を表明した人々を指す。それは一時的献身の場合もあれば、生涯にわたる献身の場合もある。サムソンは後者である。具体的な守るべき律法は、民数記6章に記述されている。**かみそりが当てられたことがない** ナジル人が守るべき律法の一つ。古代において「毛髪」は不思議な力の宿るところとされた。

毛髪の成長力と関連があるのかも知れない。髪を失うことは、力の喪失を意味していた。しかし、サムソンの力の源が毛髪にあるのではないことはいうまでもない。また彼の肉体にあるのではない。彼がその毛髪を剃ることを許したことは、彼がナジル人としての誓願を破り、神との関係を絶つたことになるのである。その結果、主はサムソンを離れた(20)。普通の人 直訳は「人間(アダム)のひとり」。

18 デリラは、サムソンが今度こそ真実を打ち明けたことを直感によって知ったのであろう。彼女はペリシテの領主たちの上ってくるようにと呼んだ。そのとき領主たちは銀をもって上ってきた。すなわちデリラとペリシテの領主たちとの間で約束されていた銀一〇〇枚のことであらう(5)。

19 彼を苦しめ始め サムソンが寝ている間に両手を縛り、7房に分けてあつた髪をことごとく切り落とした後に、侮辱し始めたのであろう。

20 彼は、「主」が自分から離れられたことを知らなかった 民数記14・42以下、ヨシユア7・12(アカン)、Iサムエル16・14、18・12、28・15(以上サウル)等、この

言葉はしばしば登場するが、非常に厳しい言葉である。ここにおいても、サムソンの力の源がその毛髪にあるのではなく、臨在される主(自身)にあることが明示される。

21 両目をえぐり出した サムソンを捕らえたペリシテ人たちは、即座に彼を殺すのではなく、まずなぶりものにして楽しもうという意図がうかがえる。ガザ 地中海沿岸にある、ペリシテの5つの都市国家の一つ。白をひいていた 通常奴隷のする仕事であり、やはりサムソンをなぶりものにしようという意図がある。

22 サムソンの髪は、剃り落とされてからまた伸び始めた この間の時間の経過がどれくらいであるか分からないが、この間は、サムソンにとっては悔い改めと神との交わりと回復の時として必要な時間であった。この後続くペリシテとの最終決戦(23〜31)の背景には、この期間の主との交わりの回復が必須であった。

参考図書 10月1日分と同じ。

聖書

マタイ7・24～27

タイトル

岩を土台とする生涯

暗唱聖句

わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます。

目標

み言葉を聞いて行つ、堅固な生き方をする。

マタイ7・24

導入

(和田牧子)

皆さんは家がつたところを見たことがありますか。大工さんたちがいっしょうけんめい土台をつくり、柱を立て、かべや屋根をうちつけて、りっぱな家をたてあげていきます。一日一日忠実にコツコツと作業をすすめ、やがて完成した家を見るとすごいなーと感動します。

岩の上と砂の上

イエスさまは山の上でたくさんのおはなしをされました。天の父なる神さまを信じて生きるとはどういうことか、わかりやすく教えてくださったのです。最後に二種類の家をたてた人たちのことを、たとえば話され

ましたよ。

ある人は自分の家を岩の上につきました。がんじょうなちよつとやそつとではくずれない岩を、深くほり、土台をしっかりつくったのです。たてるために時間がかかって、がっしりとして、とっても丈夫な家です。そのおかげで大雨がふり、水が家におしよせてきても、ゴーと強い風がふきつけても、その家はたおれることはありません。

べつの人は、家を砂の上につきました。皆さんは海の砂浜で遊んだことがありますか？ 砂で山をつくり、トンネルを掘ったりして遊ぶと楽しいですね。でもせっかく砂山をつくっても、すこし大きな波がおしよせてくると、あつというまに流されてしまいます。もし砂の上の家をたてるとどうなるでしょう。大雨がふり、水が家におしよせ、強い風がふきつけると、家はグラグラとゆれ動き、ついに土台ごとぺしゃんこになってしまいます。

み言葉を聞いて行う人

イエスさまはおはなしをとおして何を伝えたいと思われたのでしょうか。イエスさまは「わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の

家をたてたかしこい人です」と言われました。イエスさまはすでに山の上でたくさんのおはなしをされました。皆さんも毎週教会学校でイエスさまのおはなしを聞いていますね。これらのおはなしを聞いて実行する人は、岩の上の家をたてた、かしこい人と同じなんですよと言われたのです。

岩の上に家をたてることは、「み言葉に立つて歩む人生」のことです。皆さんもこれから中学生になって、高校生になって…大人になって、いろいろなところを通って行くでしょう。家族や自分が病気になったり、学校でつらいことがあったり、思いがけない災害に会うこともあるかもしれません。もちろんうれしいこと楽しいこともたくさんあります。どのような中にあっても、しっかりとイエスさまのみ言葉を心にとめて、それをいつも自分の生きるエネルギーとしてたくわえて、そのみ言葉にしたがって歩んでいくならば、どんなことがあっても大丈夫というはげましのメッセージです。

しかし「わたしのこれらの言葉を聞いて、それを行わない者はみな、砂の上に自分の家をたてたおろかな人です」ときびしめのおはなしもイエスさまはされました。

み言葉を聞いても、それをふかく心にとどめず、わすれてしまったり、み言葉にあらわされたイエスさまの愛と力がたくわえられていないと、人生の大あらしが来たとき、簡単にたおれてしまうことでしょう。

み言葉は愛のメッセージ

「み言葉を行う」ということは、コロナ感染を防ぐためにマスクをし、手の消毒をしましょうというようなルールを守り行うことは少しちがいます。聖書のことばは、神さまがどれほどわたしたちを大切に思い、愛し、わたしたちが迷子にならないように守ってくださいといえるかを教えてくれる愛のメッセージなのです。どんなときも変わらずともいてくださる力強いお父さんのようであり、やさしいお母さんのようであり、仲の良い友だちのような神さまが、わたしたちに「大好きだよ」「いっしょにいるよ」と語りつづけてくださっているのです。「ひとりじゃない」「愛の神さまがいつもいっしょ！」そのことが人生の土台となっているならば、み言葉にしたがうことは楽しいことであり、たおれてもふたたび立ち上がる力が神さまの力によってあふれてくるのですね。

♪主がわたしの手を♪(ホ89、PW17、新聖歌474)

聖書 マタイ7・24〜27 テーマ 岩を土台とする生涯

序論

(福井文彦)

5章から7章の「山上の説教」の結びとして、イエスは二種類の「土台」のたとえをお話しされました。これはイエスに対するただ二つの応答方法で、み言葉を聞いて行うか、拒むかで、私たちの生涯と永遠が決定するのです。同時に、「山上の説教」の目指すところを示しています。

一、人生には堅固な土台が必要である

イエスは最後に、岩を土台として自分の家を建てる人(24)と砂を土台として自分の家を建てる人(26)について話されました。家を建てるときに土台は一番大切な工事です。その家を建てるのに、イエスは岩を土台として建てる人は賢い人であり、砂を土台として建てる人は愚かな人である、と言われました。

なぜなら、岩は丈夫なものであり、堅固なものです。ですから、(雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲っても、家は倒れませんでした)。一方砂は弱く、

崩れやすいものです。ですから、(雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました)。しかもその倒れ方はひどいものでした)。

このたとえでは、(家)は私たちの人生になぞらえられています。したがって、(岩)と(砂)は人生の土台のことです。私たちがイエス・キリストを信じたからといって、順風満帆で、御利益があつて、よいことづくめの生活となるわけではありません。イエスを信じたら必ず商売繁盛、無病息災になるというわけにはいかなのです。イエスは(雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いて)と言われ、イエスを信じて、さまざまな人生の嵐に会い、人生にはさまざまな試練があると言われました。

ですから、その人生の土台を岩にするか、砂にするかは非常に大切な選択であり、決断を求められるのです。なぜなら、イエスが言われた(賢い人)のように、岩を人生の土台とすれば、試練に会っても、耐えて勝利することができません。また終わりの日の神の裁きの嵐にも耐えることができます。しかし、(砂)を人生の土台とすれば、さまざまな試練は人生を崩壊させ、完全な破滅すらもたらすこととなります。また終わりの日の神の裁きの

嵐にも耐えることができないのです。ですから、人生に堅固な土台が必要なのです。

二、み言葉を聞いて行う

イエスは「わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人」と言われました。その「岩」とはイエスの「ことば」であり（イテモテ6・3）、みこころであり、イエスご自身です（Iコリント3・11）。

ですから「岩の上に自分の家を建て」とは、イエスの言葉を聞いて行うことであり、「聞いて」「行う」とは聴従することです。そのことをルカによる福音書では「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据え」（6・48）と言っています。岩の上に堅固な土台をすえるために、土を掘る努力が必要ですが、それはみ言葉を深く掘り下げて学ぶことです。深く掘り下げて学ぶとは単なる研究ではなく、聖書の正しい理解を持ち、これを敬い、み言葉を日常生活（個人生活、家庭生活、社会生活、教会生活）に適用して生きることです。また、それは謙虚にみ言葉に聴き従うことでもあります。また、神のみ言葉を日常生活に適用することによって、生活の力が与えられ

ます。

その確固たる基盤の上に人生という「家」を建てるのです。しかしこの家にも試練のときがやって来ます。「雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いて」家を打ちつけるとき、これは三重の災難です。屋根には「雨」、土台には「洪水」、壁には「風」の大嵐が襲います。しかし「倒れ」ることはない理由は「岩」を土台としているからです。

対照的なのは、「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」です。「砂」とは「土台なしで、地面に」（ルカ6・49）という意味です。試練が来たとき、その「壊れ方」は「ひどい」のです。「ひどい」とは破壊が完全であるという意味です。理由はイエスのみ言葉を聞いても「行わな」かったからです。謙虚にみ言葉に聴き従わなかった、すなわち、イエス・キリスト以外のものを頼みとしていたからです。

結論

イエスは、山上の説教の最後のたとえで、主のみことばに聞き従うか従わないかによって、救いか滅びか、いのちか死かが定まると言われました。みことばを聞いて行う確かな生き方、生涯を送る者とならせていただきます。

研究資料

(中島啓一)

山上の説教の結論の部分である。15～20節では「実を結ぶ」ことに、21～23節では「父のみこころを行う」ことに強調点が置かれているが、「(実を)結ぶ」(17)、「行う」(21)の両者とも動詞は〔ギ〕ポイエオー(第一義は「行う」)である。そして今回の個所で中心的に命じられている「行う」(24)もまた〔ギ〕ポイエオーなのである。このように山上の説教の結論部分では繰り返し「行い」が強調されていることがわかる。人は、イエスの言葉を聞いて、単に知的に満足するだけではなく、「聞いて行う」(24)ことが不可欠なのである。その、聞いた上での「行い」の有無が、終末の審判において、その人が滅びるか否かを決定的に左右するのである。もちろん、この「行い」の強調は、行為義認の肯定でも、信仰義認の否定でもない。山上の説教は、それだけで完結するものではなく、「神の恵みによる救い」という福音を中心テーマに据えた福音書全体(あるいは聖書全体)という大きな文脈で捉える必要があるのである。神の恵みによって新しく生まれた者は、生き方も新しくされねばならない。その生

き方こそが、イエスとその言葉を土台とする生き方であり、この賢い人と愚かな人のたとえは、読者をそのような生き方へと誘う招きであると言える。

テキスト

24 ですから 以下のことが、山上の説教の結論として語られていることを示す接続詞。わたしのこれらのことば 5章から語られてきた山上の説教を指す。原文でも「わたしの」が先頭にあり、そこに強調点がある。キリスト者の行動の基準は、律法の成就として来られたイエス自身の言葉なのである。聞いて、それを行う者 神の言葉・神の意志に関して、聞くだけでなく、行いが伴わねばならないことが強調されている(12・50、ルカ8・21、ヤコブ1・22～25等)。岩の上に 揺らぐことのない堅固な土台を意味する。イエスは「あなたは生ける神の子キリストです」(16・16)とのペテロの信仰告白を踏まえて、「この岩の上に、わたしの教会を建てます」(16・18)と言われた。イエスの言葉に対する絶対的な信頼と服従に基づく生き方が、その人の人生を揺るぎないものとする。賢い〔ギ〕フロニモスで「忠実、賢い、眼識ある」という意味。真理を知っているだけでなく、その真理に基

づいて行動すること(25・45参照)。「愚かな(ギ)モーロス」(26)と対比。25・1〜13の十人のおとめのたとえにも同じ対比が用いられている。マタイにおける「賢い」とは、端的に言えば「忠実、従順」であること。イエスの教えに忠実に従って行動するかどうかが重要なのである。たとえることができます。直訳は「すべて〜のようである」。原文では(ギ)パース(すべて)が節の冒頭に置かれており(26節も同様)、このことが、この警句的なたとえに「招き」の響きを持たせている。聴衆・読者は聞いて行う者となるようにとの勧告・招きを受けているのである。

25 雨が降って：風が吹いて パレスチナに特有の嵐の描写であろう。突風と激しい雨により、通常はワジ(水のない川)であるところに水があふれ流れる。洪水が押し寄せ 直訳は「川がやってきて」。川の氾濫を表すのだらう。旧約では終末の審判がしばしばこういった情景で描かれる(エゼキエル13・10〜15、イザヤ28・17等)。**その家を襲っても** 雨、洪水、風のすべてが「襲う」の主語であり、その打撃の大きさを表している。**倒れませんでした** しかし賢い人は最後の審判のときにも減びな

い。理由は、岩の上に土台が据えられていた すなわちイエスの言葉に忠実に従って生きているからである。

26 聞いて、それを行わない者 イエスの言葉を聞くだけで行わないことが、その人の愚かさとなる。砂の上に砂は土台として不適当なものである。

27 倒れてしまいました 愚かな人は賢い人とは全く正反対の結末を迎える。その倒れ方はひどいものでした。ここまでは一言一句がきれいに対応して比較されてきた両者であるが、この最後の言葉はその対比のバランスを(恐らく意図的に)崩すものである。その倒れ方のひどさは、それほどまでして強調したい要点であり、そこに人の運命に対する最後の審判の徹底的な決定性が表されている。ここまで述べてきた通り、このたとえの中心的な視点は、最後の審判のときに据えられているが、とはいえ、地上での人生における種々の試練を除外する必要はない。究極的には最後の審判を見据えつつ、人間の生き方は、キリストを土台としているか否かによって、いざというときにふるわれるものなのである。

参考文献 注解書 D. A. Hagner (Word), D. Hill (NCB), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ13・15、9、18、23

タイトル

希望をもって種をまこう！

暗唱聖句

別の種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。マタイ13・8

目 標

み言葉を聞いて悟り、忍耐深く守って、実を結ぶ者となる。

導入

(後藤 真)

みなさんは種をまいたことがありますか。種をまいたことがある人はどんな気持ちでまきましたか。種から芽が出て茎が出て花が咲いたり、野菜ができたりすることを楽しみに種をまいたのではないのでしょうか。

種まきのたとえ

イエス様は人々に、種まきの話をしました。種をまく人はよく耕された良い土地の上に種をまきました。良い土地に落ちた種は育って実を結び、百倍、六十倍、三十倍になりました。

ところが、良い土地ではないところに落ちた種もあり

ました。道端に落ちた種は鳥が来て食べてしまいました。土の薄い岩地に落ちた種はすぐに芽を出しましたが根がないために枯れてしまいました。いばらの間に落ちた種は、いばらが伸びてふさいでしまいました。

イエス様の話を聞いていた人たちは、種まきの話はよく分かったでしょう。いつも自分たちがしていることだからです。でも種まきの話でイエス様が本当に何を言いたかったのか分かった人はどれくらいいたのでしょうか。

イエス様は「耳のある者は聞きなさい」と最後に言いました。「どのような意味なのかよく考えて、イエス様の話を聞きなさい」ということです。自分の考えや知恵にもとづいてイエス様の話を聞くだけでは本当の意味は分かりません。心を開き、イエス様のことをしっかりと受け止めることが大切なのです。

たとえの意味

イエス様は弟子たちにたとえの意味を教えました。種をまく人とは「み言葉(聖書のことば、イエス様の教え)」を伝える人のことです。もちろん、聞いた人が、よく意味を考えてみ言葉を受け止めることを願って伝えるので

す。よく意味を考えてみ言葉を聞くなら、イエス様の教えがもつと深く分かります。そして神様はその人に、百倍、六十倍、三十倍の実を結ばせてください。

でも、どんなにいっしょうけんめいみ言葉を伝えても、悪い者がやってきて「そんな聖書のことばなんかつまらないよ」と、み言葉を忘れさせてしまうこともあります。また、み言葉を聞いた時は喜んでイエス様を信じたのに、イエス様を信じているとか、教会に行っていることでつらい思いをしたらずぐにやめる人もいます。

また、み言葉を聞いていいなと思っても、心配事やお金のことに気を取られて、実を結ぶまでは行かない人もいます。

み言葉という種はだれにとつても同じものです。でもそれを聞く心が人によつて違います。わたしたちは、イエス様のことばを、良い心で受け止め、しっかりと聞くのでありたいと思います。

希望をもって種をまいて！

ここまできょうのお話を聞いてきたみなさんは、自分の心は良い土地かな、それともいばらがあるかな、など

と考えているかもしれません。それも大切なことです。でも、イエス様は「種をまく人のたとえを聞きなさい」と言いました。自分が種をまく人だつたらどうすればよいかなど考えてこの話を聞きたいと思います。

みなさんはだれかにみ言葉を伝えようと思ったことはありませんか。み言葉の種まきをしたと思ったことはありませんか。なかなか難しいなと思う人もいるかもしれません。確かに、み言葉を聞く心になつていない人に伝えようとしても難しいでしょう。

まず、聖書の話や教会の話ができるくらい仲良しの友だちができるように。まずみ言葉を受け止めて生活しているみなさんの姿が、まわりの人にもいいなと思われるようになるといいですね。そうすれば、種まきのチャンスがやってきます。収穫の希望をもって種をまきましよう！

♪輝かせよ♪ (PW41、イン87、イン新108)

聖書 マタイ13・1〜9、18〜23 テーマ 四つの種

序論

(宮澤清志)

イエスは多くのたとえをもつて神の国の真理を説き明かされました。この「種を蒔く人」のたとえの意味は、イエス自身が説き明かしておられます。

一、み言葉にある命

種を蒔く人が蒔く種とは、〈御国のことば〉すなわち神のみ言葉です。そして種が芽生えるのは、種の内に命があるからです。この命には人を生かし、豊かに実を結ばせる力があります。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きるのではなく、4」との言葉は、人間を観察して得た結果ではありません。人間を造られた方による説明です。

イエスはまず〈種蒔き〉となつてみ言葉を語られました。それは自分の栄光のためではなく、私たちに命が必要だからです。

命は何もないところには生じません。必ず命から命が生れます。そして生れた命は、養われ守られなければ消

えてしまいます。私たちの命は神から与えられたものであり、神から離れたところでは保つことができません。神と言葉を交わす交わりの中でさらに豊かなものとされていきます。

二、時が試練

土地の状態そのものは、種が落ちた時点である程度わかります。しかし、神の言葉という種が蒔かれた人の心の状態は、すぐにわからないことがあります。しかし、どんな心であるかは、観察している中で、時間の経過とともに明らかになつてきます。

〈道端〉に落ちると、種は接触していますが、中に入ることはありません。これはみ言葉を聞いても自分に結び付けない人です。〈岩地〉に種は入っていきますが、根を下ろすことはできません。み言葉を聞いて喜んでいますが、生き方を変えるつもりはありません。〈茨の間〉では根を下ろし芽が出て、上に伸びることが妨げられています。み言葉が中心でも第一でもなく、他のことで心がふさがれているので、実を結ぶに至りません。しかし、もし良い地に種が落ちるなら、種は入り込み、しっかりと根を下ろし、充分に伸びて豊かに実を結ぶこと

ができます。

み言葉に対するこれらの応答は、私たちが福音を伝える相手の状態であり、またかつての私たちの姿です。

聖書の時代の農業は、種をまいてから耕す方法だったとも言われています。土が薄く、日本のように畑と道がはっきりと分けられていないところに種をまき、後から耕したところが畑となって成長していったというのです。この方が、み言葉と私たちの関係に近いかもしれません。

最初からよく耕された柔らかな心というものはありません。とにかく種をまき、耕すことが必要です。み言葉を聞き、日々の歩みの中で苦しんだり戦ったりする中で、み言葉の助けを得、やがて実りを得ることが多いのではないのでしょうか。

三、約束されている収穫

良い地であつても、種がまかれなければ収穫はありません。しかし、一度種がまかれると、最後の結果ははっきりと違ってきます。特にイエスはみ言葉の収穫は驚くほど大きいと約束されました。私たちもキリストを信じ、み言葉を聞き始めても、最初から大きな変化はない

ように見えるかもしれませんが。しかし、み言葉を聞き続けるときに、必ず変わってきます。

ですから、できるだけやわらかい心、聴いて従う心をもつことが大事です。また、毎日の出来事の中で、み言葉をあてはめて、慰められたり、進む指針を得たり、あるいは自分の考え違いを示されること、これがみ言葉の種まきです。

蒔かれた種が収穫に至るには、時を要します。世話も必要です。しかし、み言葉の種がまかれなければ、人は生きられないのです。イエスが忍耐深く、み言葉の種をまき続け、ようやく弟子たちが整えられていったように、私たちも自分に対して、周囲に対して、種を蒔き続けましょう。豊かな収穫があると約束してください。神は、必ずみ言葉を聞き続けるものを成長させ、祝福してください。

結論

命の種である神のみ言葉を聞いて悟り、忍耐深く守って、豊かな実を結ぶ者となりましょう。

研究資料

(金井由嗣)

本日の箇所原文には、特に積義に影響するような特別な用語や構文は見られない。原典にこだわるより、良質の翻訳聖書で前後の文脈に注意して繰り返し読むことが大切である。

テキストト

1 その日 前章の記事との連続性を強調。マタイでは12・1〜13・52が同じ安息日の出来事として描かれているが、マルコの平行箇所では間にいくつかの出来事が挟まれている。マルコは、それぞれのエピソードに対して類似した別の時期の出来事を関連付けて記しているのかもしれない。いずれにせよここでは、このたとえが語られた時期に注意する必要がある。パリサイ人や律法学者からの批判と疑い、主の家族からの無理解は、主イエスを神から遣わされたメシアと信じる弟子たちにとってつらい経験であった。群衆は主イエスのもとに集まっていたが、その多くは病気の癒しなどの奇跡や実利を求めていた。少し前には(11章)バプテスマのヨハネさえ、イエスが本当にメシアなのかどうか、疑問を漏らしていた。

神の国の福音が期待したようには多くの人々に受け入れられない現実を前にした弟子たちに対する主の励ましと教育が、13章の一連のたとえの骨子をなしている。

3〜9 種まきのたとえ

たとえの意味は明瞭であり、その解釈も主イエスが自ら教えているとおり(18〜23)なので、解説は不要。

11 天の御国の奥義

これを、主イエスが「奥義」(新共同訳では「秘密」、聖書協会共同訳では「秘義」と呼んでいることに注意したい。

奥義(ギ)ミユステーション) は、特別に許された人

しか知らされない隠された真理を意味するが、新約聖書ではしばしばその奥義が神の民に「明らかにされた」とへの喜びが強調される(『聖書神学事典』)。たとえのそれぞれのモチーフが何を意味するか、頭で理解しただけではこのたとえの「奥義」を知ったことにはならない。それはなお、「聞いても悟らず、見ても認めない」鈍い心にとどまっている状態である。

1、「奥義」は、「天の御国」の性質にかかわっている。マタイは神の名を使用することを避けて「天の御国」と呼び変えているが、他の福音書で用いられる「神の国」

と同義語である。当時のユダヤ人の理解では、「神の国」は地上の権力を無力化する圧倒的な力をもって君臨すべきものであり、誰もその力には抵抗できないはずであった(ダニエル2・44など)。ところが、イエスのこのたとえでは神の国が人間の側の応答によって左右され、拒否され得るものとして描かれている(ハンター、ラッド参照)。それゆえ、重要なのはみ言葉を聞く者の聞き方と、聞いたみ言葉に対する応答の態度である。神の国は権力で地上を支配するのではなく、多くの反対や無関心に出会いながら、福音を積極的に受け入れた少数の人々の間で少しずつ成長し、やがて実を結ぶものなのである。この後に続くたとえ(麦と毒麦、からしだね、パンだね)によって、さらにこの点が強調される。

2、「奥義」には、喜びと祝福が伴う。16〜17節で主が語っているのは、旧約の預言者や義人が熱心に願って見聞きすることができなかつた福音に弟子たちが与っていることの喜びである。まかれた種の多くが実を結ばなかつたとしても、「百倍、六十倍、三十倍」という収穫の喜びが損失をはるかに上回ることになる。たとえの焦点は、この収穫の喜びに当てられている。それはまた、11・

25〜30の主イエスの言葉と同じ方向を示している。「知恵ある者や賢い者」ではなく、み言葉を聞いて素直に受け入れる「幼な子」に神の国の奥義(福音)が啓示される。奥義を理解するために必要なのは知的能力ではなく、イエスの弟子として生きる、単純な信仰である。

12 持っている人は…もつと豊かになり 天国の奥義を持つている人とは、福音を素直に受け入れて従う主イエスの弟子たちのことである。福音に聞き従いつつ主に近づいていく人には、さらに福音の奥義が解き明かされる。それゆえ、聖書のみ言葉に対する知的理解も次第に備わっていくのである。それに対して、知的理解にとどまって本気で福音を受け入れない人には、み言葉はますます理解困難なものとなり、知的に理解することさえ不可能となってしまうのである。

参考図書 織田昭『マタイによる福音』、A・M・ハンター『イエスの譬えの意味』、G・E・ラッド『神の国の福音』、藤巻充『祝宴への招待』、『聖書神学事典』、『J・Nolland(New International Greek Testament Commentary)』、D. L. Turner (Baker Exegetical Commentary)。

聖書 マタイ18・21〜35

タイトル 赦しと愛の恵み

暗唱聖句 わたしは七回までとは言いません。七回

を七十倍するまでです。 マタイ18・22

目標 神の無限の赦しを覚え、人を赦す者となる。

導入

(飯田勝彦)

「みんなと仲良くしましょう。」とよく言われるでしょう。でも、みんなの友だちの中で仲が悪い人っていますか？ いつも喧嘩し合っている人。いつも友だちの悪口を言っている人。お互いに責め合い、赦し合えないと辛いですね。赦されることは慰めですが、赦すこともすばらしい恵みだと知りましょう。

赦される恵みを体験できなかった家来

ある時、ペテロが「主よ、兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか？」と尋ねました。イエスは「わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです」と答えられました。そして、天国を王と家来たちとの清算に例えて

話をされました。王のもとに王から一万タラントの借金をしている家来が連れて来られました。主人である王は、僕に「お前の妻子や金財産を売ってでもして、借金を返せ！」と命じました。一万タラントの借金とは今で言えば、6千億円ほどに相当するものでした。家来は押しつぶされそうな借金を目の前にして王の前にひれ伏し、「もう少し待ってください。そうすればすべてお返しします」と必死になって願いました。すると、王は家来をかわいそうに思い、膨大な負債をすべて免除してやったのです。

しかし、その家来は自分から百デナリ(約百万円相当)を借りている人を、負債を返すまで牢に入れたのです。この家来はどうして、王から赦されたように自分から借金をしている人を赦すことが出来なかったのでしょうか？ この家来は、自分の負債が帳消しにされたことを恵みとして体験することができなかったのではないのでしょうか。彼は王のあわれみを、心から感謝するどころか、ただ「赦されてラッキー、得した！」としか受け止められなかったのです。

赦され、赦す恵みを体験しよう！

もし、みんながこの家来なら王から赦されたことをどのように思いますか? 「やった! これで何も心配しなくても良いや」。パンザーイ!」で終わりますか?

もし、赦されたことを大きな恵みとして体験したなら、赦してくれた王に精一杯の感謝をするでしょう。そして、赦された恵みを噛みしめながら、その恵みに生きて行くでしょう。赦された恵みを体験してすぐに、あわれみが必要な者を牢に入れるようなことができるでしょうか?

人を赦すことができるのは、赦された恵みを体験している人です。みんなは「赦された」という体験がありますか? 赦しの体験をさせてくださる方は、私たちの救い主イエス・キリストです。

私たちは罪という負債を背負わされています。それは、一億円よりも重くて大きいものです。それを背負い続けると一生苦しみの中を歩かなければならないどころか、永遠の滅びへと向かってしまいます。でも、王であるイエス・キリストは、私たちを罪から解放するために、十字架でご自分の命を投げ出し、私たちの罪の負債を赦してくださいました。このイエス・キリストの十字架を

自分のものとして信じ受け取る時、キリストの救いの溢れる恵みを体験することができます。

赦しを体験している者は、イエス・キリストに感謝すると同時に、イエス・キリストを愛します。そして、体験した恵みを隣人に実践できるようにされます。それは、他者を赦す形であらわれます。

誰かを赦さないことで苦しむのは、実は自分なのです。いつまでも怒りや憎しみを持ち続けることは、心が赦せない相手に縛られていることとなります。相手を赦すことができ初めて心が楽になります。赦されることを嫌がる人はいません。本当の赦しを体験できた人の心は平安になります。ですから、赦すことは損することではなく、自分にとって相手にとっても大きな恵みなのです。

まとめ

イエス様に赦される恵みは一度だけではありません。正直にイエス様の元に出るならイエス様は何度でも赦して下さいます。それはイエス様の愛を体験するときです。その赦しと愛の恵みを体験するなら人を赦し愛するものに変えられていきます。

♪ゆるすためです♪(ホ58、イン25、イン新33)

聖書 マタイ18・21〜35 テーマ 七回を七十倍するまで

序論

(石田高保)

イエス様を信じて生まれ変わった人は、生涯、主について行きたいと願うものです。同時に身近な人々に仕えてゆきたいとも願うもので、これはクリスチャンの本能と言ってよいでしょう。それはイエス様の言うしもべの在り方です。「あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい」(マルコ10・44)。その特徴は、豊かに赦すライフスタイルです。

一、赦しの土台

私たちが他の人を赦せるとするならば、それは神様がまず、私たちを赦してくださったからにほかなりません。神様から赦されていることを本気で受け取らないうちは、どんなに歯を食いしばっても他の人を本気で赦すことはできないのです。なぜなら私たちの本性は赦してはなく、仕返しだからです。人から言われたことに言い返すことや、されたことにやり返すことには、なんの努力も要りません。復讐心は人間の罪深い性質から自由に流

れ出る悪です。リベンジという英語がすっかり日本語として定着してしまったほどで、スマートな響きですが、要は復讐、意返しという意味です。人間性が原罪によって歪められているので、放っておいたら人間社会はリベンジで溢れ返ってしまうでしょう。そんな復讐心の洪水の中で、本気で他の人を赦して行くためには、どうしても神の恵みが必要となります。神様から赦されていることを受け取らなければ口先だけの赦しで終わります。

さて私たちの犯した罪が、十字架で贖われた時、神様の罪に対する怒りは私たちの身代わりとなられたイエス様に下されました。神様はその完全ないけにえに免じて、信じた人すべてを赦してくださいました。私たちに何の罪滅ぼしも、償いも、善行努力も要りませんでした。ただ主を自分の救い主と受け入れただけです。「罪の報酬は死」ですから(ローマ6・23)、死んでお詫びをするほかはない罪という借金を、イエス様は十字架で死ぬことによって、私たちの代わりに支払って下さいました。罪という多重債務ですっかり首が回らなくなっていたところを、イエス様が肩代わりして下さったのです。罪の借金地獄から解放され、大手を振って歩けるように

なりました。このことはしもべが王様から一万タラントの負債を免じられたというたとえに通じます。

二、赦しの方法

赦しについての聖書の原則は、「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神もキリストにおいてあなたがたを赦してくださいましたのです」(エペソ4・32)。つまり赦すことはクリスチャンの選択科目ではなく、必修科目です。〈主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか〉、この当時の決まりでは、三回赦せばそれ以上は赦さなくて良いというものです。ペテロはその限度を倍以上に気前よくは喜んで〈七回まででしょうか〉と質問しています。彼は七回も赦せば十分で、それを越えたら赦さなくてもいいと考えていたからでしょう。じつさい人の同じ過ちを三回も赦せたら、それは聖人君子かしません。それに対してイエス様の言われたことは〈七回を七十倍するまでです〉、つまり無限に赦し続けなさいということでした。それに続くたとえ話では(23〜35)、ある王が家来の1兆円という巨額な債務を棒引きしやっています。家来はあまりの寛容さに気が遠くなり、感激の涙を流したことで

しょう。ところがそのすぐ後で、その家来が百万円貸している人に返済を迫り、返せないとわかると債務監獄に入れてしまったというのです。この家来のようなことをしてはいないかと探られます。赦し続けることは自分の身を蝕むむしばことになり、百害あって一利なしです。赦そうと決心するまで時間は止まり、場合によっては何十年という時を失うでしょう。赦さないと種を蒔けば、断絶という実を刈り取ります。しかし赦すという種を蒔けば、和解と平和という実を刈り取ることができます。

結論

では、具体的な赦しの方法とはどのようなものでしょうか。①認識。誰について、何を赦さないでいるかを明確にする。人のせいにせず自分が赦さないでいたことを所有する。②悔い改め。イエス様によって神から赦されているにもかかわらず、人を赦さないでいたことを悔い改める。仕返しする権利を手放す。③血潮による赦しを受け取る。④自分を傷つけた人を祝福する祈りをする。⑤思い出すたびに赦すというライフスタイルを保つ。⑥聖霊の導きによって和解する。以上のように、イエス様に仕えるしもべは豊かに赦す者です。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

21 そのとき マタイにおいては、新しい話をはじめのための導入の言葉となっている。兄弟 ここでは肉親の兄弟ではなく霊の兄弟、すなわち神の家族であるキリスト者を指す。何回 この言葉には、イエスから教えられているように、赦すには赦す^{ゆる}が限界がある、という思いが言外に含まれている。七回 この数は、質問者であるペテロが赦すことのできる最大限の数字だったのである。ユダヤ教においては、赦されることのできるのは3回までであった。

22 七回を七十倍するまで 何も、この言葉は字義どおりに490回赦すという意味ではない。イエスがここで言わんとすることは「無限に」という意味である。罪を犯した人に対しては、制限を設けるべきではない。なぜならば、神の愛は無限だからである。しかし、無限に赦すことと、罪を不問にすることは異なる(15〜20参照)。

23〜27 イエスは前2節の意味を補強するものとして、ひとつのたとえを語られる。一万タラント(24) 1タ

ラントは六千デナリ。1デナリは労働者一日分の賃金。わかり易くするように、労働者の日給を1万円とすると、六千億円。しかし、あまりピンとこないもので、当時の王と比較すると、ガリラヤとペレヤの王ヘロデ・アンテパスの年収は200タラント、アケラオの年収は600タラント。また権勢を誇ったソロモン王は666タラントだったといわれている(1列王10・14)。かわいそうに思って(27)はらわたが痛むほどの感情を表す言葉。赦し(27)「解放する」「自由にする」という意。負債を免除してやった(27) ここでは「取り消す」「帳消しにする」などの意味である。王は、猶予するという選択肢ではなく負債そのものがないものと認めたのである。

これらのことから考えて、このたとえ話の真の意味は何であろうか。まず、一万タラントという負債の額は、いうまでもなく人が一生かかっても返すことができないほどの大きな負債である。このような誇張とも思えるたとえによって、イエスは、人間の持っている一生かかっても返すことができないほどの罪の大きさを語っている。同時にそのような大きな負債を無条件に免除した王にも注目したい。王なる神の支配とは、ここで示される

ほどに深い憐みの支配であるということがはつきりと示されている。また、**清算が始まる**と(24)とあるように、清算が始まるまで自らの負債のあることに気づかない僕の姿は、罪の中でありながらもその罪に気付かない自らの姿そのものである。

28 ~ **34** 一方負債を免除された僕は、100デナリを貸している仲間を赦すことができなかった。100デナリそれ自体は、労働者100日分の賃金であることを考えると確かに高額である。しかし、この僕の負債である一万タラントから考えるとわずか60万分の1である。**出会った**(28)とは、むしろ「見つけ」とも訳すべき言葉で、偶然見つけたというイメージよりは、むしろ捜して見つけ出した、というイメージである。また赦された僕がとった行動も常軌を逸している。まず、**その人を捕まえて**(28)とは、羽交い絞めにするという意味の言葉である。また、**首を絞め**(28)とは、窒息させる、あるいは息を止めてものを言えなくするという非常に強い言葉が用いられている。あれだけの負債を免除された人物とは思えない取り扱いである。最後には、赦された僕は仲間を **牢に放り込んだ**(30)。

この様子を見ていた彼の僕仲間、事の成り行きを主人に説明した(31)。この僕のとった態度は、主人の怒りを引き起こした(34)。そしてこの僕を **悪い家来**(32)と呼んで断罪した。一万タラントの負債をつくった時でさえ、この主人は僕をこのようには呼ばなかった。仲間の負債を赦すことのできないこの僕の中に、友の罪を赦すことのできない人間の姿が示される。

35 前節までで、イエスによるたとえ話は終わった。この箇所はこれまでのたとえ話の適用である。人間が神に対して負っている負債(罪)に比べれば、人間同士の負債(罪)は取るに足りないものである。私たちの創造者である神が私たちを赦してくださったのであれば、私たちも、互いに、しかも無制限、無条件に赦さなければならぬ。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解(中)』、増田誉雄『新聖書注解 新約1「マタイの福音書」(以上いのちのことば社)、他

聖書 マタイ22・1〜14

タイトル 天国への招き

暗唱聖句 何もかも整いました。どうぞ披露宴においでください。

目 標 マタイ22・4 神の招きにお応えして、天国の幸いを知る者となる。

導入

(飯田勝彦)

イエス様は、私たちに神様の恵みと真理が分かるように例えを用いてお話しされました。今回は天国についてです。

天国は喜びが満ちている

みんなは天国について考えたことがありますか？ 案外、普段の生活では意識しないことだと思えます。でも、身近な人の死に接したり、お葬式に行ったりすると「死んだらどうなるのかなあ。天国であるのかなあ。もしあるとしたらどんな所だろう」と考えるでしょう。

イエス様は、天国のことを話されるとき披露宴を例えにされました。披露宴とは結婚式のあとに行われるパー

ティーです。皆が綺麗な服を着て、美味しい食事を食べたり、歌を歌ったりして新郎新婦を心からお祝いします。そこには、満面な笑顔と喜びが満ちています。聖書の中には天国は賛美が溢れ、涙も悲しみも苦しきもないところと記されています。さらに、死もないとあります。ですから、天国は永遠に続く喜びで満ちているところなのです。

天国にあなたは招かれている

皆さんは、結婚式や友だちの誕生日会に招かれたことはありませんか？ なかには自分の誕生日会にお友だちを招いたことがある人もいるでしょう。

今朝の個所では王が王子のために披露宴を計画し、多くの人を招いていたことが記されています。でも、招いていた人が来ようとしなかったのです。招いた王はどんな気持ちだったのでしょうか。王は「来ないから仕方がない」とあきらめず、しもべたちを遣わして「さあ、披露宴のために何もかもととのっているからいらしてください」と招待客に声をかけたのです。しかし、王からせっかく招かれていたのにその招待客たちは気にもかけず、仕事に戻ったりしました。そして、その他の客たちはし

もべたちを捕まえて殺しました。何とひどいことをしたのでしょうか。王はあきらめないで招待客を招いたにも関わらず、彼らはそれに応えず、逆に反抗したのです。この招待客たちは王から招かれていることの恵みが分かっていなかったのです。それに対して王は怒りました。この怒りの背後には恵みを理解してもらえない王の悲しみがあつたことでしょう。

皆さんは今、神様から天国へ招かれています。この招きに対してどのように応えますか？

天国に入る備えを神様はあなたにしておられる

すでに招かれていたすべての客は、王の招待に応じませんでした。そこで王は、しもべたちに「披露宴の用意はできているが、招待した人たちはふさわしくなかった。だから大通りに行って、出会った人をみな披露宴に招きなさい」と命じました。しもべたちはさっそく通りに出かけていき出会った人をみな集めて来ました。すると披露宴は客でいっぱいになりました。

そこで王が集まってきた客を見ようと会場に入ると、礼服を着ていない者が一人いました。集められた者は、

通りで急に声を掛けられたので礼服の用意ができていないのは当たり前です。この礼服は、王宮で王から与えられるものでした。しかし、このひとりの者は、礼服が与えられたにも関わらず、自分からそれを着なかつたのです。この者は、王の披露宴に招かれ、しかもその披露宴に相応しい礼服まで備えられていたのにも関わらずそれを拒んだゆえに「この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。この男はそこで泣いて歯ぎしりすることになる」と言われてしまったのです。

王なる神様は、あなたを天国へ招き同時にそれに相応しい礼服を備えておられます。それが、イエス・キリストの「義の衣」です。

まとめ

義の衣は、キリストを自分の救い主と信じる者には、誰にでも与えられる礼服です。あなたは「義の衣」である礼服をすでに着ていますか？

♪感謝と喜びを♪

(プレイズ&ワーシップ合本楽譜集173)

聖書 マタイ22・1～14 テーマ 婚宴への招き

序論

(小泉 創)

イエス様が、天国について教えておられる個所です。天国は王が、王子の婚宴の席を設けて、人々を招待するようなものだ、と話し始められます。イエス様が十字架にかかられる数日前のできごとです。

一、招きを拒む人々

最初に招かれた人々は、あらかじめ招待を受けたときには、「行きます」と答えていました。ところが当日になると、そ知らぬ顔をして、畑仕事、商売など、取り立てて急ぎでもない自分たちの用事を優先しました。一般の結婚式でもそのような非礼はゆるされません。ましてや王の招待です。それは王自身を侮辱することでしたが、王は気に留めていないかのように、別のしもべに丁寧な招待の言葉を託し、人々が来ることを願いました。しかし人々は気にもかけず自分の用事を優先し、また王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしまったのです。

ここに至って、彼らは王の怒りに触れました。問題は

人々が招きを拒むことで、王ご自身を退けたことでした。

この王とは、神様の象徴です。招かれながら、招待を拒んだものとは、契約の民ユダヤの人々をあらわしています。旧約聖書を通して、救い主をおしえられ待ちながら、イエス・キリストを拒み、十字架につける人々の姿です。神様は歴史を通じ、どれほど忍耐強く待ち、働きかけてこられたでしょうか。しかし、人々はそれを気にも留めずに、神様の愛の招きを拒んでいるのです。

二、集められた人々

婚宴の準備のため、大変な労力、財がつきこまれ、あとは喜びの時を待つだけですが、婚宴とともに喜ぶ民がまだいません。王は、町の大通りで出会った人々を誰でも連れてくるようにとしもべに伝えます。王子の婚宴にあずかれたのは誰でしょうか。きよく、正しく、罪なき善人たちではありません。(通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った人々をみな集め)ました。とにかく婚宴の席に連れてこられ、用意された席はいっぱいになりました。彼らは、思いがけず豪華な喜びの席につくことになりました。王のもとに呼ばれ、そこで喜びをとるにできるといふことはいかに幸いなことでしょうか。

彼らの姿こそは、契約の民でもなかったのに、恵みによってイエス様のもとに集められた異邦人である私たちの姿です。

三、放り出された人

いよいよ婚宴がはじまります。王が客を迎えようとして入ってきます。これはクライマックスです。喜ばしくも身が引き締まる厳かな場面です。

王の目はその場にいる多くのの中の、一人に留まります。彼は、礼服をつけていませんでした。礼服がなかったのではありません。王は招いた者たちのために服を用意し、ほかの人々はその礼服を着ていたのに、この人だけがそれを着ることをしなかったのです。なぜでしょうか？

王は、この人に「友よ」と呼びかけ、礼服を着なかった理由を問いかけます。しかし、この人は黙っているばかりです。正当な理由はなかったのです。ただ王を拒んで、敬うことをせず、彼のための礼服を着ようとしたのかかったのです。

マタイ伝では、「友よ」という問いかけが三回でてきます。一回目は20章のぶどう園で朝早くから働きながら、

1デナリしかもらえず主人に文句を言った者たちに。二回目はこの個所。三回目は、ゲツセマネの園で、イエスを捕らえるために口づけをして裏切ったイスカリオテのユダに対して。ある注解者は、招きに応えながらもイエス様を拒んだイスカリオテのユダのことが、このたとえでも語られているのではないかと思います。私たちも神の招きに応じながらもなお心がかたくなることがあります。そのような者に神は愛と忍耐をもって「友よ」と呼びかけてくださるのです。それでも拒むなら、外に放り出されるしかありません。それは自分で選んだ道です。

神に呼ばれ、招かれた者たちは、それにふさわしい装い、ふるまいが必要です。すべてのことはゆるさされていますが、何をしてもよいというわけではありません。「キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです」(ガラテヤ3・27)。

結論

恵みによる神の招きを受けた私たちは、神の差し出してくださいるキリストを着るものとなりましょう。

研究資料

(宮澤清志)

この物語は、ルカによる福音書の「盛大な宴会のたとえ」(14・16〜24)との類似点が指摘される。しかし、その類似点よりも、より多くの相違点のゆえに、この両者は別々のものであると考える見方がある。よってここではマタイの文脈から考えてみる。

テキスト

1 再び イエスはそれまでも、「二人の息子のたとえ」(21・28〜32)、「悪い農夫たちのたとえ」(21・33〜46)と、二つのたとえを語られてきた。それらの主題は、神の国は、異邦人や罪人をも含めた新しいイスラエルに与えられるということであり、今回のテキストによつてその主題がさらに明瞭にされる。

2〜5 マクニールは、この第一部の比喻として、王¹¹神、王子¹²イエス・キリスト、婚宴¹³キリストとその教会の結合を表す象徴的表現、であるとしている。招待した客(3) 前もつて招待状を受け取り、それを受け入れていた客だと思われる。もう少し具体的には「その名をもつて呼ぶ」という意味の言葉が用いられている。つ

まり、具体的にはこの時点で王である神は既にこれらの人々を招待し、また人々も自らの意思表示をしていたというのである。3節の表現は、王である神は、そのような人々に対して再度の招きをしたということである。しもべたち(3、4) とは、旧約時代の預言者を指すものと思われる。気にもかけず(5) 「知らぬ顔をして」「それに心を用いなかった」「心がそちらに向かなかった」という意味の言葉である。では何に心が向いているかが語られているのが「自分の畑」であり「自分の商売に」ということである。これは、この世のわざにのめり込んで神の招きを断る人々の不遜な姿が描かれている。自己優生的な態度は、神の招きに対して自らその道を閉じるという結果を招来するのである。

6〜7 この箇所は、5節までの筋書きにはおよそふさわしくないという理由から、ある者は後代の挿入であるという見方や、また別には寓話的解釈をする見方等、いくつかの可能性が指摘される。一方、5節までの流れの当然の発展と見る見方もある。いずれにしても、王である神が、「まず恵みを受けよ」とせつかく招いた最初の客人たちが、いかに不実で忘恩的であったかを物語る意味

では、当然ここに描かれるべきものであったのであろう。その招きを拒む者の結果は裁きである。

なお、この個所の出来事を、紀元70年に起こったローマ軍によるエルサレム陥落を指すとみる見方もある。

8〜10 2〜5節に続く第二の物語である。あくまでも、全体の主題は「神の恵みを受けよ」ということであって、その主題はここでも同じである。しかし、その「招き」の範囲は、これまで招きに与っていたユダヤ人から、ユダヤ人を含めたすべての人々へと移行する。その結果、**披露宴は客でいっぱいになった**(10)のである。ふさわしくなかった(8) 王の丁重な招きを、悪意と反感をもって拒絶したことを指す。**良い人でも悪い人でも**(10) ここでは倫理的・道徳的な意味での「悪人」「善人」という意味合いである。神の招きは倫理的・道徳的な「正しさ」は問われない。すべての民が招かれているのである。

11〜14 この物語の第三部。いよいよ王が祝宴に臨む大切な場面である。このたとえのポイントは、招待した王がその披露宴にふさわしい礼服を着せてくれる、その礼服を喜んで受けるか、それとも自分の持ち合わせのもの

に固執するか、という点にあるようである。**礼服**(11) この場合、礼服とは、各自が持参するものではなく、王宮で王から貸し与えられた着物であるという理解がある。この者は、王から貸し与えられた礼服を拒否して王の前に出て、その威光を傷つけたというのである。王の招きに対する拒絶を意味するというのである。一方この礼服は、キリストを着ることであり(ガラテヤ3・27)、新しい人を着ることであり(エペソ4・24)、信仰によって与えられる「正義の外套」である(イザヤ61・10)との見方もある。あるいは適切な生活の変化という者もある。それらの者に弁解の余地はない(12)。**招かれる人は多いが、選ばれる人は少ないのです**(14) 最後の一文は、深い意味を持つ言葉である。畑や商売に行った者たちは「招待されて」いたが「選ばれ」なかった。また、「通りから」招かれ「た者たちの中に、一人「選ばれ」なかった者がいた。いずれもその最終的な責任は自らが負うのである。

参考図書 R・T・フランス『ティンデル聖書注解 マタイの福音』、増田誉雄『新聖書注解新約1 マタイの福音書』(いずれもいのちのことは社)、他

聖書

マタイ25・1～13

タイトル

主の再臨に備える

暗唱聖句

目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。

マタイ25・13

目標

霊の目を覚まして、主のご再臨に備えた生き方をする。

導入

(土屋開夫)

みんな毎朝、学校には遅刻しないで行っていきますか？
いつまでもスマホなんか見て夜更かししていると、寝坊して遅刻してしまいます！ 遅刻したら先生に「廊下立ってなさいっ」なんて叱られたり…、最近はそういうの無いのかな？

でも、遅刻して教室に入れないよりもっと大変なことがあります。もし、天国に入れてもらえなかったら?! 今日「目をさましていた女性」と「眠っていた女性」のたとえ話です。よく聞いてね。

油を用意していた女性と、していなかった女性

イエス様がこの世の最後の時期に、再び天から地上に來られる事を「再臨」と言います。その時、イエス様は、イエス様を信じて待ち続けていた人たちを天国に迎えて下さるのです！ 先生もその日をドキドキ、ワクワクしながら、いつも楽しみに待っています。

イエス様はその「再臨」の時の事を色んな譬え話で教えて下さいました。その一つが今日の譬え話です。

当時のイスラエルでは結婚式のパーティーをする際、花婿さんとお友達が、花嫁さんの家に、花嫁さんとお友達を迎えに行きました。普通は夕方頃に迎えに行くのですが、遅くなる事もあったようです。ですから女性たちはランプを持っていないといけません。それに今のライトのように点けたり消したり、簡単には出来ません。一度つけたら、大事にその火を灯し続けるのです。そして、火を灯し続けるには油が必要なのです。

さて、この時は花婿さん達が迎えに来るのがとても遅くなって、なんと夜中になってしまいました。花嫁さんのお友達は待ち疲れて眠っていました。でも突然「さあ、花婿だ、迎えに出なさい！」と合図の聲がしました。

お友達のうち5人は、ランプの油をちゃんと多めに用意していましたが、他の5人は用意していませんでした。きつと花婿たちがすぐ来ると思っていたからでしょう。ランプの明りが無ければ、暗い夜道は歩けません。油を慌てて買いに行きましたが、もう間に合いません。花婿さん達は、油をちゃんと用意していた5人の女性たちを連れて結婚パーティーに向かいました。そして部屋の扉は閉められ、後の5人の女性たちは入れてもらえませんでした。

イエス様を信じ続ける心

イエス様はこの譬え話によって何を教えておられるのでしょうか？ 花婿はイエス様の事です。花嫁のお友達達は、イエス様を信じている私たちの事です。そしてランプの灯火は、イエス様を信じる心「信仰」の事です。では、油は何でしょう？ それは「イエス様を信じ続ける心」です。いつも信じている、そしていつまでも信じている心です！

もし、私たちがイエス様を信じる「信仰」が、短いロウソクのようならどうでしょう？ 今は点いてい

るけど、やがてスグ消えてしまうでしょう。子どもの今はイエス様を信じていても、中学生、高校生…、大人になつたら信じる心の火が消えているかも知れません。もし、そんな時に突然イエス様が天から迎えに来られたら、天国での素晴らしいお祝い会に入れてもらえなくなってしまう！ そんな事になったら大変ですね！

そうならないためには、ずっとイエス様を信じ続ける心を持つ事です！

私たちはいつも呼吸を続けています。また毎日、ご飯を食べ続けています。そのように続けることは「生きること」です。聖書を読み続け、お祈りをし続け、日曜日の礼拝も、大人になってもずっと続けて下さいね！

まとめ

助け主である聖霊様は、私たちがイエス様を信じ続ける力を与えて下さいます。どんなに遅くなってもイエス様は必ず迎えに来られます。聖霊様の力によって、皆でイエス様をずっと信じ続けましょう！

♪歩こうイエスの道を♪ (PW15、イン81、イン新101)

聖書 マタイ25・1～13 テーマ 主の再臨に備える

序論

(小泉 創)

誰一人未来のことを知ることはできませんが、気になり不安も抱えています。聖書で禁じられている占いが、テレビや雑誌などにあふれているのもその証拠でしょう。

弟子たちが世の終わりのしるしについて尋ねたのを受けて、主イエスは世の終わりについての警告をお話になりました。その中に今日のたとえもあります。

一、婚宴を待つ

一般的に世の終わりということから受けるイメージは、先のない暗いものでしょう。それまで積み上げてきたものが終わり、無に帰してしまふ、と考えるからです。しかしイエスが世の終わりについて教えるのに語られたたとえばは婚宴に関するものでした。婚宴は新しい人生の始まりに期待して胸をふくらませる希望の時です。つまり、神を信じる者にとって、世の終わりは空しい絶望の

時ではなく、待ちに待った喜びの時だということですが。世の終わりについて、恐れを抱いている子どもたちがいるかもしれません。聖書の中にある喜びの訪れのイメージに目をとめ、伝えていきましょう。

二、遅くなる

花嫁を迎えに来る花婿を待つのは、花嫁の十人の友人たちです。花婿と共に夜道を歩いて花嫁の待つ祝宴の場に行くためのともしびを娘達は持っていました。予備の油まで準備してきたのは五人だけでした。この五人は、思っている以上に時間がかかった時のために、多めの油を持っていました。しかし残りの五人は、花婿はそう遅くはならず、まだ明るいうちに来るに違いないと勝手に思いこんでいたのでしょうか。油が足りなくなるかもしれないとは全く考えもせず、備えていませんでした。

しかし花婿は遅くなりました。娘達は十人とも疲れ果てて寝込んでしまいました。問題はいざ花婿が来たときに婚礼の祝宴の場まで一緒にいけるかどうかです。しかし半数の娘達は十分な油が残っていなかったのです。「さあ、花婿だ」という声に目を覚ましてから慌てて油を調達に

走る事になりました。

油を用意していた五人の娘達は、花婿と一緒に婚礼の祝宴に向かいましたが、油を調達に行った娘たちがやつとたどり着いた時にはもう戸は閉じられ、祝宴に入る事ができませんでした。十分な備えがあるかないかが、十人の娘たちの明暗を分けたのです。

三、目を覚まそうそい

このたとえの中では五人の賢い娘たちも、五人の愚かな娘たちもそろって寝入ってしまった。ですから目を覚ましていなさい、というのは、眠るな、ということではなく、その時のための備えをするということです。

「その日、その時をあなたがたは知らない」と言うことを、この直前イエス様は繰り返しておられます(24・36、42)。人の子の到来、主人がいつ帰ってくるかはわかりません。明日かもしれないが、まだしばらく先なのかもしれない。まだ大丈夫だろう、とたかをくくり、不忠実な振る舞いをする人々は、突然その時が来て、慌てふためくことになります。逆にもっと早いだろう、と勝手に思いこむことにも警告が与えられています。

不健全な信仰をもつ人たちは、世の終わりが近いとおって、貯蓄をしている場合ではない、仕事をしている場合ではない、福音を伝えることだけに専念しなさい、と極端な生活をすすめますが、それは間違っています。目を覚ますと言うことは、いつも不健全な切迫感を持ち続けて、浮き足だっているということとは違います。その日がいづ来ても慌てふためかないように、聖霊に助けられながら、いつも主の御顔の見える生活を続けることです。毎週の礼拝も、日々の祈りの時も、主と顔と顔をあわせる再臨の時、喜びの婚宴の時の備えとも言えます。そのときに慌てふためかないように、主がおいでになるその日をお待ちしながら、落ち着いた信仰生活を送っていきましょう。

結論

主イエスを信じる者にとって最高の喜びの日は、主が再びおいでになる日です。私たちはその日に困り果てないように、いつも主と共に過ごしましょう。

研究資料

(中島啓一)

「忠実で賢いしもべ」(24・45)として、主の来臨を待ち望むべきであることを教える前章を踏まえ、この章では、まずこの「十人の娘のたとえ」(1〜13)を通して「賢さ」の面が、続く「タラントのたとえ」(14〜30)を通して「忠実」であることが扱われる。

テキスト

1 花婿 キリストを指すことは明白だろう。十人の娘婚礼の一連の行事の間中、花嫁に付き添い世話をする女性たち。教会はキリストの花嫁にたとえられることが多いが、ここでは、主の再臨を待ち望む教会(あるいはクリスチャン)を、花嫁ではなく、この付き添いの女性たちにたとえている。天の御国は…にたとえることができます。天国は単なる来世のことだけではない。マタイ福音書の言う天国は、ルカ福音書の神の国(神の支配とも訳すことができる)に相当する。それはキリストの降誕によって既に地上にもたらされ(ただし未完成)、やがて終末の時に完成するものである。再臨までの「教会の

「時代」は、その「既に」と「未だ」が混在している状態である。そんな中間の時代にあつて、再臨を待ちながら過ごすクリスチャンの心構えをイエスは教えるのである。ともしび 棒にぼる布を巻き付けた松明たいまつかもしれない。この種の松明の布は短時間で燃え尽きてしまい、その都度、別の布で包み直し、油を含ませねばならなかった。花婿を迎えに出る 少し後の時代のものだが、パレスチナの一般的な結婚式の手順が知られている。まず夜の祝宴に向けて、花婿が花嫁を迎えに来る。その花婿を花嫁の付き添いの女性たちが外に迎えに出る(花嫁は家の中にいたまま)。そして新郎新婦と付き添いの女性たちが行列をつくって花婿の父の家まで進んでいき、そこで祝宴が開かれるのである。時代は少し異なるが、このたとえの婚礼もほぼそのような手順であったと考えられる。

3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持って来ていなかった 花婿を待っている間も火をともしておくのか、それとも到着の報を聞いてから火をつけるのかはわからない。いずれにしても大事なことは、彼女たちは(時間どおりであろうが遅れようが)花婿が到着したならば、その時から始まる大事な役割に備えて、油を

十分に用意しておく必要があったということである。

4 賢い娘たちは：油を入れて持っていた 万一に備え油を用意していたことが「賢い」と呼ばれる理由である。油は聖霊を象徴するものとされるが、ここでもそう捉えてよいだろう（ただし、そこまで意図されていないとする注解者もいる）。

5 娘たちはみな眠くなり寝入ってしまった 賢い者たちも寝てしまったことに注意。「目を覚ましていなさい」（13）というこのたとえの結論からすると、彼女たちにも落ち度があるようにも思えるが、彼女たちは叱責を受けずに、その後の役割を果たし、祝宴の恵みにあずかっている。

6 夜中になって：呼ぶ声があった 「人の子は思いがけない時に来るのです」（24・44）とあるとおりである。

8 ともしびが消えそうなので 「悪しき者のともしびは消える」（箴言13・9、ヨブ18・5参照）のイメージが背後にあるのかもしれない。

9 分けてあげるにはとても足りません 分け合うならば全員の油が不足し、結婚式が台無しになってしまいます。主の再臨に備えておくという信仰の姿勢は、他の誰かと

貸し借りできるような類のものではないのである。

10 用意ができていた娘たち 婚宴の部屋に入ることができたのは「用意ができていた」からであった。戸が開けられた 救われる者と滅びる者とがひとたび定められ、もはやそれを変えることはできない。

11 残りの娘たち 花婿の遅れに備えていなかったばかりに、婚宴の部屋から閉め出された彼女たちは、今や「残り」の存在に落ちぶれた。

12 私はあなたがたを知りません 最後の審判の厳粛さを思い知らされる言葉（7・23参照）。

13 目を覚ましていなさい 前述のように、賢い娘たちも眠っていたが、それはこの警句と矛盾しない。彼女たちは来たるべき時への備えが十分にできていたゆえ、祝宴に連なることがゆるされたのである。クリスチャンは再臨に備えて、日常生活に支障がでるほど気を張り詰めている必要はない。ただし霊的には目を覚まし続け、そのことよって準備が整っていることに安心し、平安のうちには再臨を待ち望み続ければよいのである。

参考図書 10月15日分と同じ。

聖書

マタイ25・14〜30

タイトル

タラントを活かす

暗唱聖句

よくやった。良い忠実なしもべだ。

マタイ25・21

目 標

与えられた賜物を生かして、神に仕える者となる。

導入

(土屋開夫)

テレビのバラエティー番組などに出る人を「タレント」と言いますね。それは「才能ある人」という意味で、今日の聖書箇所にも出て来る「タレント」というギリシヤ語からきている言葉です。それは当時のお金の単位の一つで、1タラントは今の日本のお金でいうと、およそ6千万円にもなります。という事は、2タラントは1億2千万円、5タラントなら3億円!

でも今日の聖書のお話は、お金の事を言っているのではありません。父なる神様が、みんなに素晴らしい才能をたっぷり与えておられるという事なのです! でも大事な事は、そのタラントを「使う」という事なんです。

それぞれタラントを預かった僕

ところで「再臨」って何だか覚えていますか? そう、この世の終わりの時代、イエス様が天から再び来られて、イエス様を信じて待っていた人たちを天国に迎えて下さる事です。今日の譬え話もその時の事です。

あるご主人が旅に出る時、3人の僕たちにそれぞれ5タラント、2タラント、1タラントの財産を預けました。それはその財産を「ただ大事に持っている」という事ではなく、「それをよく使いなさい。増やしなさい」というご主人の願いでした。

「そんなにたくさんさんの財産を預けられても困る!」とみんなは思うかも知れませんね。あるいは「お金の額に差があつてズルイ!」と思うかも知れません。でも「それぞれその能力に応じて」と書いてあります(15)。ベテランの僕もいたでしょうし、新米の僕もいたでしょう。ご主人は、一人一人の事をよく分かっています、無理なく使いこなせる分のタラントを、信頼して預けたのです。

そして5タラント預かった僕も、2タラント預かった僕も、その財産をよく活かし、よく働いて倍に増やしました。ところが1タラント預かった僕は、そのタラント

を全く使わず、地面の中に隠しておきました。

ご主人が長い旅から帰って来た時、僕たちの会計報告を聞き、正確に計算しました。そして、5タラント、2タラントを預けた僕に「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と褒めて下さいました。それぞれ自分の能力とタラントに応じて、ご主人のために忠実に働いたからです。

ところが1タラントを預かった僕は、タラントを全く使わなかった言い訳をしました、「恐かったのです」と。この僕は「悪い怠け者のしもべだ」と叱られ、お屋敷の外に追い出されてしまいました。

キミのタラントは何だのん？

この譬え話の意味は何でしょう？ ご主人はイエス様の事です。僕たちは私たちです。ご主人が帰ってくる事は「再臨」の事です。私たちはイエス様が地上に帰って来られる「再臨」を、何もしないでただ待つものではありません。イエス様から一人一人に預けられたタラントを、ご主人であるイエス様のためにフル活用するのです！

そう言う「ボクにはなんの力も才能もない…」っていう子がいるかも知れません。でもイエス様からタラン

トを与えられてない人は、一人もいません。まだその素晴らしいタラントに気づいていないだけです。

ここでみんなに二つ質問します。考えてみて下さい。
①「あなたの好きな事は何ですか？」どんな小さなことでも、好きな事はタラントにつながります。

②「あなたはイエス様のために何ができると思えますか？」今日の個所のすぐ後でイエス様は言われました、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」(マタイ25・40) だから、誰かのために何か良いことをするのは、イエス様にする事と同じなのです。

まとめ

お友達にイエス様を紹介する？ 誰かのためにお祈りする？ おばあちゃんのお見舞いに行く？ イエス様から「よくやった！グッジョブ！」って褒めてもらえるように、失敗を恐れず、良い事を実行してみましよう！

♪主は僕らを用いてくださる♪ (PW59)

聖書 マタイ25・14～30
 テーマ タラントの譬たとえ

序論

(小泉 創)

私たちは何かの仕事や奉仕をするときに、どのように思うことが多いでしょうか。喜んで精一杯できるでしょうか。ストレスを抱えて、つらくなることが多いでしょうか。

一、しもべたちに任された財産

世の終わりについてイエス様が弟子たちに教えられている場面です。主人が旅に出るときに、三人のしもべたちに財産を任せましたが、任された額がそれぞれ異なっていました。ひとりには五タラント、もうひとりは二タラント、最後のしもべは一タラントを任せられました。なぜ主人は、それぞれのしもべに異なった財産を任せられたのでしょうか。その理由は聖書に書いてあります。〈それぞれその能力に応じて〉です。みんな能力が異なっていたので、主人はそれぞれの能力に見合った財産を預けました。

私たちは何につけ他の人と比べ始めると、ろくなこと

にはなりません。なんであの人ばかりなどと考えはじめても、何も良いことにはなりません。すべての人が違うのですから、任されているものも当然違います。能力が違うのに同じ責任が与えられるならその方が不公平です。任されているものが違うということは、実は主人が公平な方であることの証拠です。神様は私たち一人一人にふさわしいことを任されています。

二、一緒に喜んでくれ

しばらく経って主人が帰ってきました。決算の時です。五タラント渡された者が商売でもうけた五タラントを差し出すと主人が言いました。〈よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう〉と。しかし五タラントはわずかなものではありません。おおよそ三万日、すなわち80年分の給料に相当する金額です。五タラントがわずかであるなら、さらに多くのものとはいったいどれほどのものなのでしょうか。

二タラントをもうけたしもべにも主人は同じ言葉かけます。〈よくやった。良い忠実なしもべだ〉と。主人は能力に応じて与えられたものに忠実になしたことを評

働いています。(主人の喜びをとみに喜んでくれ)とまるで同労者のように、声をかけています。主人はしもべたちに働きを与え、一緒に喜ぼうとしていたのです。

三、主人はどのような者か

問題は一タラント預かっていたしもべです。彼は地面に埋めておいた一タラント(16年分の給料に相当)を掘り出してきてこういいます。(ご主人様。あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集める、厳しい方だと分かっていました)。このしもべにとつて主人は、自分の持つている物をむしりとつていくような厳しい人に見えていました。自分には一タラントしか任されていないのに、きつと何倍もの成果を求められるのだ。失敗したらどんな目にあわされるかわからない。それならむしろ何もしない方がよい。自分はその過大な要求に応えることはできないのだから、と。

しかし、この主人はそれぞれのタラントに応じた働きを喜んだのです。一タラントのしもべも任されたものにふさわしい働きでよかつたのです。時に私たちはあまりにも多くのものを要求されていると思つてストレスを抱

えることや、完璧に全部しなければならぬと思ひこんで自分自身にも、他の人にも、厳しくなりすぎることもあるかもしれません。この一タラントの人を反面教師としましょう。

- ・与えられている能力を、生かさずに地に埋めたりしない。積極的に活用する。

- ・人と比べて、わたしが何になるのかなどと言わない。
- ・主なる神様を恐ろしい、ないところから奪い取るお方ではなく、能力と使命を与え、一緒に喜んでくださる方として信頼する。

結論

主の御前に立つ日に、私たちの人生の決算があります。イエス様から、よい忠実なしもべよ、一緒に喜んでくれと声をかけられることは何と幸いですでしょうか。私たちに与えられている能力を、神様の為に、そして人の為に生かしましょう。失敗をしないようではなく、主の帰りを待ちつつ、生き生きと働く忠実なものとしていただきましょう。

研究資料

(小平徳行)

イエスはここで、再臨を待ち望む御国の民がどのような歩みをすべきかを教えられた。それは、一人一人に与えられた賜物を活用する生き方である。ここに忠実な生き方が問われている。

テキストト

14 財産を預ける人 御国の王であるイエスを指す。自分のしもべたち 「自分の奴隷たち」の意で、御国の民を指している。奴隷というと全く自由のない、人格を完全に無視された存在を想起しがちだが、ここに出てくるしもべはかなりの自由と裁量権が与えられている。預ける 「引き渡す」の意。裁量権の一切を任せたといいことである。しもべに対する主人の信頼と期待とを感じさせる。旅に出る イエスが地上の使命を終えて、天の御座に着かれること。19節の「帰って来て」は再臨を指す。

15 それぞれその能力にに応じて 主人はしもべたち一人一人をよく知っていた。一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを渡して 御国の民は皆違った賜物を受けている。それは自分のためにで

はなく神の御国のために働くことを期待されて預けられたものである。タラント もともと重さの単位であったが、貨幣の単位に変わっていった。一般に一タラントは六千デナリとされ、一デナリは労働者一日分の賃金とされている。すると一タラントは六千日分、つまり16年分ほどの給料である。こうしてみると一タラントといえども極めて高額であった。

20〜23 忠実な(ギ)ピストス 「信用できる」の意。わずかな物に忠実だったから 五タラントもうけた者にも、二タラントもうけた者にも同様の評価をしている。主人はしもべの忠実さに目をとめている。五タラント、二タラントは、しもべの立場からすれば非常に高額であるが、主人からすれば「わずかな物」であった。多くの物を任せよう 預かったものが「わずかな物」であるならば、「多くの物」とは想像しがたい莫大なものである。キリストとともに天の御国を支配する特権の大きさを思わせる。主人の喜びをともに喜んでくれ 直訳「あなたと主人の喜びに入れ」。忠実なしもべにとつてキリストとは「あなたの主人」と言うことのできる特別な関係にあるゆえ、この喜びは業績をもたらしたことの一次的な

喜びでなく、主人との永続的な交わりのもたらす喜びである。

24～25 一タラントを預かったしもべがそれを活用しようとしなかったことの弁解がここになされている。あなた様は時かかったところから刈り取り、…ここにこのしもべの主人観が表れている。それは無理難題を押し付けて、理不尽な要求をする主人というものであった。キリスト者の歩みにおいて神観は大きく影響する。怖くなり このしもべが一タラントを地の中に隠したのは、失敗をするなら、ひどい仕打ちを受けるに違いないと考え、何もしない方が無難だとの判断による。預け主の期待よりも、自分を守ることを優先した。このしもべに主人の愛も信頼も通じなかった。彼の内にあるのは恐怖と不信だけである。彼は一タラントを感謝せず、迷惑な重荷であると受けとめ、預け主の意思を踏みにじった。

26～27 怠け者(ギ)オクネロス この語源は[ギ]オクネオー「躊躇する」で、判断や決断ができないために行動することができない優柔不断な姿を指している。銀行に預けておくべきだった ローマ帝国の支配下の地域では銀行はかなり普及しており、利子も結構高かったという。

主人が帰るまでの期間は長かったゆえ、相当の利息がついたはずである。それだけにこのしもべの怠けぶりは徹底していた。

29 だれでも持っている者は与えられてもっと豊かになり、持っていない者は持っている物までも取り上げられるのだ これは当時よく知られていた格言で、イエスは他でも語っている(13・12、ルカ19・26他)。これは社会的、経済的原則であるとともに、霊的世界にも当てはまる。与えられているものを用いるなら、それはますます増し加えられ、用いないなら、あるものまで失われてしまふ。真に価値あるものは、用いることによってのみ有し続けることができる。神はキリスト者がそれぞれに託されたものに忠実に生きることを求めておられる。

30 そこで泣いて歯ざしりするのだ 不敬虔な人の究極の運命を示すユダヤ教の伝統的な表現(8・12、22・13等)。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解』、増田誉雄『マタイの福音書』、『新聖書註解・新約1』、(以上、いのちのことば社)、織田昭『マタイによる福音書』(松本工房)、他。

聖書

詩篇145・8〜16

タイトル

日々のお糧を与える神

暗唱聖句

あなたは、時になつて／彼らに食物を

与えられます。

詩篇145・15

目標

日ごとの糧を与えてくださる神様を覚え、感謝と信頼をもつて生きる。

導入

(今田雅子)

皆の好きな果物や野菜って何かな？ 果物だったら大体好きだけど、野菜は嫌いなものがあるな〜っていう人多いんじゃない。誰かに大好きなものをプレゼントされたら、その人に「有難う」って言うよね。じゃあ神様にはどうかな？ ご飯を食べる時なんか「有難う」って言うてる？ 祈ってから食べている人は言うてるでしょう。でも「何で言うのかな」って思ったことないかな？ それは何故かと言うと、神様から食べ物や飲み物をいただいているからなのです。「え〜何で？ 果物や野菜を作る人がいて、スーパーで売ってるのを買ってるよ。」そうだよ。でも、曇りや雨ばかりで晴れなかったらどうかな。反対に晴ればっかりだったら果物や野菜って出

来ないよね。太陽も雨も、神様が創られて私たちにプレゼントしてくださっているからです。だから神様に「有難う感謝します」って言うんですね。

イエス様が教えてくださったこと

さて、あるとき弟子たちがイエス様に、「どうやって祈ったらよいのですか？」と聞きました。イエス様は、「こう祈ったらいいよ」と教えられました。それが主の祈りなんです。その中に「我らの日用の糧を、今日も与えたまえ」、聖書には「私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください」(ルカ11・3)と言う祈りがあります。イエス様は、「毎日ちやくんとご飯を食べて、元気に生活できるようにお願いしなさい」と言われました。もし、皆さんが病気になるってご飯が食べられない、飲み物も飲めない時があったとしたら。色んなことを心配したり、どうしようって悩んだりして食事のどを通らない時があったとしたら。元気に生活できるかな？ できないよね。いつも食事が美味しく食べられるってことは、心も体も悪いところがなく元気だったことだよ。だから、この祈りには、「今日も元気に生活できるように心と体を守ってください」と言う願いがあるのです。また、「我らの、

私たちの」とあります。だから、自分のことだけでなく、ご飯が食べられなくて苦しんでる人たちが沢山いることを忘れないで祈ることも教えられます。皆の周りにもそんなお友だちがいるかも。もしもいたなら、教会学校の先生や大人の人に言ってくださいね。そして、この「日用の糧、日ごとの糧」は食べ物だけではなく、私たちが生活する時に要るもの全部のことなのです。私たちは自分たちの力で「買った、つくった」と思うことがあります。でも、本当は神様から全部いただいたもの。私たちの命さえも神様からいただいたものなのです。

今日の暗証聖句の「あなたは時になんて彼らに食物を与えられます」とは、神様はその時その時、必要な食べ物私たちに与えてくださると言うことです。イエス様も「空の鳥を見なさい。彼らは働いていない。でも、天の父は育てているよ」と言われました。また、イエス様御自身、5つのパンと2匹の魚で五千人以上の人たちのお腹をいっぱいにされました。神様を信じて頼って生活すること、日ごとの糧をいつも与えてくださる神様に感謝して歩むことが大切なのです。

収穫感謝の始まり

収穫感謝の日の始まりは、一六二〇年、イギリスの熱心なクリスチャンの人たちが、聖書に従った自由な信仰を持つために新大陸のアメリカに行きました。でも、荒れた土地を切り開いて畑にすることはとても大変なことだったのです。アメリカにきた半分くらいの人は死んでしまいました。けれども、元々そこに住んでいた人たちに種を分けてもらい、作り方を教えてもらって一生懸命働いて次の年には沢山の作物ができたのです。そして、植物を育て、成長させ、実りを与えてくださった神様に感謝して礼拝をささげました。これが収穫感謝礼拝の起りです。

今の日本は、外国から沢山の食べ物を買うことによって、学校や家での「食」が支えられています。私たちが知らない沢山の人たちに支えられているからこそ私たちが食事ができるのです。そのことを忘れないでね。また、料理してくれる人にも感謝しましょう。飢餓に苦しんでいる人たちの為にも「神様、日ごとの糧を与えてください」と祈りましょう。皆さんの毎日が神様への感謝でいっぱいになりますように！

♪神さまといつもいっしょ♪ (イン新88)

聖書 詩篇145・8～16 テーマ 日々の糧を与える神

序論

(石田高保)

収穫感謝礼拝にちなんで、神様に感謝することについて思いめぐらしたいと思います。そもそも神は私たちの日常に対してどのような関心をお持ちなのでしょう。

一、神様の綿密なご配慮

まず第一に言えることは、神様は私たちの生活が成り立ってゆくために多大な関心を示し、きめ細かな配慮をしておられるということです。〔主〕は情け深く、あわれみ深く、怒るのに遅く、恵みに富んでおられます。神様のご配慮の全貌を見ることはできず、わずかにその一端を垣間見ることがだけです。私たちが生きる上で必要とするものは、神様がぜんぶ備え、満たしてください。イエス様は「父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」と、そのことを明らかにしておられます(マタイ5・45)。

人間の生活を成り立たせようとする神様のご配慮は、

クリスチャンであるかないかにかかわらず、全人類に及ぶもので、一般恩寵と言われます。(すべての目はあなたを待ち望んでいます。あなたは今、時になつて／彼らに食物を与えられます)。これは人間だけでなく、あらゆる生き物を覆う広大無辺な恩恵です。クリスチャンだけに神様のご配慮があるのではなく、無関心な人々にも例外なく及んでいます。父なる神としてすべての人間を愛し、いつくしんでおられ、どのような行動であってもこの恩恵から漏れている人はこの地上に一人もいません。まして信仰によって神の子どもとされたクリスチャンは、なおさら必要が満たされることを確信して安らぐことができます。

それにもかかわらずイエス様は「私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください」と祈るように言っておられます(ルカ11・3)。それは一つには私たちのうちに神様への感謝が増し加わるためではないでしょうか。事の大小にかかわらず、事あるごとに祈れば、かなえられたときに、自力ではなく神の恵みによることを確認することができます。

二、感謝の祈りの祝福

第二に言えることは、神様に感謝することが私たちに祝福をもたらすということです。そもそも感謝できることと自分が祝福ではないでしょうか。たとえば自分は感謝が足りないと思ったからといって、神様の愛が細るわけはありません。しかし事あるごとに感謝するならば、神様の愛がよりわかってきます。神様は、私たちの欲しいものをくださるとは限りませんが、必要とするものとはことごとく与えてくださいます。〔主〕よ、あなたが造られたすべてのものは／あなたに感謝し／あなたにある敬虔な者たちは／あなたをほめたたえます。感謝することは、神様への賛美につながるということです。この場合の賛美は歌うことだけではなく、思いや言葉において神様をあげることです。神様を神様であるがゆえにほめたたえるということは、詩篇を読むと身についてきます。祈りにこたえてくださったことのゆえに感謝することはなじみやすいと思います。そのように感謝することが身についてくると、神様が生きておられることのゆえに賛美することもわかっていくということです。

また「神が造られたものはすべて良いもので、感謝し受けるとき、捨てるべきものは何もありません」(1テ

モテ4・4)とありますので、私たちは何の宗教的なタブーもなく食事を楽しむことができます。もちろん「すべてが益になるわけでは」ないという側面も顧みなければなりません(1コリント6・12)。

さらに、にわかには感謝できないことに対しても感謝することができます。「私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。…ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています」(ピリピ4・11、12)。つまり足ることを知る、です。タラントのたとえによれば、神様は私たちの管理能力にしがたって、霊的、物質的な富を任せておられることがわかります。これは主の再臨後に現れる御国で、それぞれの賜物にしがたって世界の統治を任されることと関係があるようです。つまり私たちは後の世のために、いま与えられているものをいかに聖書的な価値観で使用するかが問われているのではないのでしょうか。来たるべき世での奉仕に間に合うための霊的トレーニングなのかもしれません。

結論

以上のように生活の全領域にわたって綿密にご配慮下さる神様に感謝して歩んでまいりましょう。

研究資料

(金井由嗣)

アメリカの収穫感謝礼拝は、ピューリタン入植者が先住民の援助によって初めての収穫を得たことを感謝し、先住民を招いて共に祝った出来事に由来する。このストーリーがどこまで歴史的事実を伝えているかについては疑問の余地があるが、入植者が先住民に感謝して良好な関係を保っていた時期についての記憶を伝えることには意義がある。聖書は、収穫の喜びを祝う時には家族、同胞に加えて「寄留者、孤児、やもめ」と共に「【主】の前で」喜び楽しむように、と命じている(申命記16・11～12、14)。自分で生活する手段を持たない人々や帰属する集団が異なる人々とも収穫物を分け合い、喜びを共有するように命じているのである。収穫感謝のメッセーヂが、神の名のもとに自分の利益追求を正当化する「繁栄の神学」とならないように注意すべきである。

この詩の特徴と意義

145篇はヘブル語のアルファベット順に各行が始まる「いろは歌」である。この形式には記憶を助ける教育的な意味がある(石黒)。一方、この詩の表題には詩篇で唯

一「賛歌」〔ハ〕テヒラーという単語が使われ、かつ表現・内容ともに146～150の5つの「ハレルヤ詩篇」の導入の役割を果たしている。詩篇には悲しみや悩みの詩が多いが、そのすべてを通った後で、「神をたたえる」ことが詩篇の結論となっていることに意味がある(小林)。

テキスト

8 【主】は情け深く あわれみ深く 怒るのに遅く 恵みに富んでおられます 出34・6における神の自己紹介である。この詩の1～7節では神の偉大さがたたえられているが、この節からはその「大いなる神」がご自分の民に対して「恵み深く」あることに焦点が当てられる。

9 【主】はすべてのものにいつくしみ深く この詩では、全21節の中に「すべて」〔ヘ〕コル)が16回現れる(翻訳では様々に訳し分けられている)。創造主である神の働きが被造物すべてに及んでいる、とのメッセーヂを強調している。そのあわれみは 造られたすべてのもの上にあります 「造られたもの」〔ヘ〕マアセー)は4節では「みわざ」と訳されている。4節では能動的な神の働き、9節と10節では神の働きによる被造物を指している。この両者に同じ単語が使われていることが大事である。

収穫の豊かさ以前に、我々の存在自体が神の創造によっていることへの感謝が捧げられている。

10 あなたが造られたすべてのものは あなたに感謝しあなたにある敬虔な者たちは あなたをほめたたえます
被造物すべてが神に感謝するのが当然であるが、神を神として認識し、礼拝し、賛美することは神の民とされた「敬虔な者たち」の特権である。聖徒は全被造物に先駆けて「賛美の先陣を果たすべきである」（石黒）。

11 彼らはあなたの王国の栄光を告げ あなたの大能のわざを語ります 聖徒の役目は賛美の先駆けを果たすことにとどまらず、賛美されるべき方をすべての人々に宣べ伝えることをも含んでいる。賛美と宣教は一体である。「王国」(≡マルクト)は新共同訳では「あなたの主権」、聖書協会共同訳では「あなたの王権」と訳される。死んでから行く「天国」ではなく、この世界における神の主権を表す「神の国」である。13節では神の主権の永遠性が歌い上げられる。

14 「主」は倒れる者をみな支え かがんでいる者をみな起こされます 神の主権(王国)の時間的永遠性に続いて、すべての人、特に社会的弱者に及ぶその主権の普

遍性がたたえられる。「まことの王の統治は、武力や人間的な政治力によってではなく、むしろ弱者の救済と必要の満たしという方法でなされる」(石黒)。

15 すべての目はあなたを待ち望んでいます。あなたは時になつて 彼らに食物を与えられます 新共同訳は「ものみながあなたに目を注いで待ち望むと／あなたはときに応じて食べ物をくださいます。」と前後を連続させて訳す(聖書協会共同訳も)。原文の微妙なニュアンスを表現することに成功している。時になつては、その時々(生きるための)必要に応じて神が食べ物を与えてくださるという意味である。命を支えてくださる神への信頼を教えるとともに、不必要な蓄財や贅沢に対する戒めでもある。主イエスの山上の説教(マタイ6:25-34)に通じる。16節も同様のメッセージ。神の祝福は「生けるものすべて」に向けられている。神の民は率先して神を賛美することによって、他の人々を真の神への賛美と礼拝に招くよう召されているのである。

参考図書 森本あんり『アメリカ・キリスト教史』、鍋谷堯爾『詩篇を味わう』、石黒則年(新聖書講解シリーズ)、キドナー(ティンデル)、小林和夫(著作集8)。

聖書

イザヤ7・15-17

タイトル

インマヌエル預言

暗唱聖句

見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。

目 標

困難の中にも共におられる神に信頼する者となる。

イザヤ7・14

導入

(今田雅子)

今日からアドベントです。待降節とも言いますが、アドベントって「ワクワクしながらクリスマスの準備をするとき」なのかな？ それもあるかもしれないけど、それだけではなくって、もういちど来られるイエス様を待ち望むときなのですね。皆さんの心はイエス様に向いてるかな？ イエス様をお迎えする準備はできてるかな？ さあ、今日も聖書のことばに心を向けましょう。

さて、教会学校で「聖書のことばに心を向けましょう」と言われているのに、何故かM君は聞いてないみたいです。教会学校の礼拝が終わり、K君が「M君、さっき礼拝でなに考えてたの？」と聞いたたら、「算数の宿題ができなく

て困ってるんだ」と言ったので、「じゃあ、ほくもその宿題まだやってないから一緒にしよう。」それで二人は一緒に宿題をすることになりました。K君が「神様、今から宿題をします。解るように、集中できるように助けてください」と祈ってから、「M君、解らないところがあつたら聞いてね」と言いました。すると、苦手な算数の宿題、一人でやってた時だったら、なにがなにか解らなくてすぐに止めてたのに、なぜかできていつて短い時間で宿題がぜんぶ終わってしまったのです。なぜできたのかな？ お祈りしたから？ それはそうです。それとM君一人ではなくって、K君と一緒にだったからじゃないかな。皆も、誰かと一緒にだったら、勉強に集中できたことであるでしょう。

イザヤの預言

今日は預言者イザヤが救い主イエス様の誕生を預言した聖書の箇所です。しかも、なんと、イエス様が生まれる70年以上も前にイエス様の誕生が預言されていたのです。預言者っていう人は、神様から言われたことを言われたとおり伝える人のことです。

イザヤが預言した時代、イスラエルの国は、北王国イ

スラエルとエルサレムを首都とする南ユダ王国に分かれていました。色んな国が争いあつていましたが、ついに「南ユダ王国も隣の国々からもうすぐ攻撃される」という大変なことになったのです。人々の心は恐れと不安でいっぱいでした。そのとき、イザヤは、神様が「敵の国は敗れ、消えてなくなつてしまふから恐れなくてよい」と言われている。そして、「神様が、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもつている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」と預言したのです。「インマヌエル、(神が私たちとともにおられる)」ということを聞いた人々は、大きな慰めと励ましが与えられたことでしょう。だって、その昔、イスラエルの民がエジプトから脱出し絶体絶命の時、神様によつて助けられたことを聞いていたからです。

例話とまとめ

小学一年生のS君は、お父さんの仕事の関係で、転校しました。クラスに意地悪な人がいて「学校に行きたくない! 行かない!」とお母さんに言っていました。ある日の教会学校の礼拝で「おおしくあれ強くあれ」の賛美をしました。S君は学校に行く時、「神様はどこにでも共

におられる」と歌いながら学校に行く道を歩きました。すると一人で学校に行きました。それから、毎日この賛美をしながら学校に行きました。いつも一緒にいてくださる神様を信じて頼つたS君、共におられる神様がS君を強くされたので学校に行くことができたんですね。皆さんの周りには、お父さんやお母さんやお友だち、その他にもいろんな人がいますね。でも、その人たちがいつも一緒にいるつてこと、ないよね。誰かが一緒にいると、安心だし、困ったときは助けてもらえるよね。家で一人で留守番、友だちの家に一人で行く、そういうとき一人だったら、「寂しいなく、ちょっと怖いなく」つて思つたことないかな? でも大丈夫、神様はどんなときでも一緒にいてくださるのです。

どうしたらいいかわからないとき、苦しいとき、悲しいとき、むずかしい問題の中にあるとき、私たちと共におられる神様を信じ頼つて歩んでいきましょう。

「その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である(マタイ1・23)。

♪主イエス様いつも私と♪インマヌエル♪(PW8)

聖書 イザヤ7・1〜17 テーマ インマヌエル預言

序論

(石田高保)

ここは有名なキリスト降誕を預言した個所です。しかも預言者イザヤが記した時代は、そのことが実現する七百年あまり前でした。マタイはこれを引用して、イエス様の誕生こそ預言の成就であると断言しています(マタイ1・23)。これによって神のご計画は決して泥縄式でも思いつきでもなく、その実現は天地創造前に定められていたことです。

一、インマヌエルの存在

イザヤの預言はこうです。おとめ、つまり彼の妻がみごもり、やがて男の子を産み、その子が物心つく前に、アラム・エフライム連合軍は敗れ、イスラエル王国は生き残るから恐れるなど。この預言は重層的で、究極的にはやがて生まれるキリストについてのものです。へその名はインマヌエルと呼ばれる。これをマタイは「訳すと、『神が私たちとともにおられる』という意味である」(マタイ1・23)と説明しています。これは救い主にイン

マヌエルという名前が付けられるということではなく、インマヌエル、「神が私たちとともにおられる」という在り方として現れ、そのように地上を生きて下さるということです。実際のところ主を受け入れたら、神が共におられることが腹でわかってきます。イエス様が神でありながら人となって生まれて下さった目的は、私たちが共にいて下さるためでした。主は十字架にかかって私たちの罪を贖って救いを完成し、復活して天に昇られました。聖霊によって私たちと共にいて下さいます。天上にだけおられるのでも、会堂にだけおられるのでもなく、家庭、職場、学校、食事、買い物先、運転中、ありとあらゆる場所で主は共にいて下さいます。そして私たちとおしてご自身をこの世に現し、共に働いて私たちの隣り人を救いに導こうとしておられるのです。そのためにこの世に生まれて下さり、この地上に来られました。しかも永遠に共にいて下さる神たるお方です。マタイ福音書は、インマヌエルで始まり、インマヌエルで終わると言われます。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(マタイ28・20)。この事実によって私たちは寄る辺のない不安や孤独を克服するこ

とができるのです。

二、インマヌエルの生活

クリスマスとは、別な観点から言うとき地球が天から救い主を受けた日です。これほどの歴史の重大事件を、はじめは誰ひとり気づきませんでした。御使によって教えてもらわなければ人間には分からなかったのです。イザヤは預言しました、「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み」と。この言葉を御使は8世紀後に引用し、マリアの夫ヨセフに告げています。「マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです」(マタイ1:21)。救いというのは日常の言葉に直せば「人生の解決」ということになるでしょう。クリスマスとは、人生の解決をしてくださる方が天から来てくださった日です。生理的なプロセスとしては、主はマリアの体内に聖霊によって宿り、月満ちて赤ちゃんとして生まれてくださいました。この方はやがて成長して30才のとき神の国を宣べ伝え、33才のとき十字架にかけられて死なれました。これによってイエス様は私たちの罪を取り除くことのできる道を開かれました。つまり人生に解決のあることを

明らかにされたわけです。神の子は死ななければ私たちを救うことができなかつたとは、実に痛ましいことです。

しかしここにはイエス様の復活のことも暗示されています。(その名はインマヌエルと呼ばれる)。主は復活して、依り頼む者といつでも一緒にいてくださるようになりますと預言されているわけです。裏返せば、いつも共にいて下さるからには、死から甦ったことが大前提になるので、インマヌエル信仰はそれ自体が復活を証明していることになります。あらゆる証明の中で最も強力なものです。しかもあらゆるクリスチャンが自分の言葉と体験で証明することができる強みがあります。「イエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことがおできになります」(ヘブル7:25)。いつでもどこでも救い主であられるということです。

結論

私たちはイエス様を受け入れたという瞬間において救われましたが、その方が共にいて下さることをいつでも確認できることは継続的な救いです。私たちはインマヌエルの祝福について身をもって証しして行きましょう。

研究資料

(小平徳行)

この箇所はキリストの処女降誕の預言であるが、この預言は、当時の具体的な危機的状況下でなされたものである。時はユダの王ヨタムが死に、アハズが即位して間もなくのことで、BC 734年と推定される。

テキスト

1 エルサレムに上って来たが、これを攻めきれなかった時のことである。ここは物語全体を包括した序文である。当時、アッシリアの脅威にさらされ、圧政に苦しんでいたイスラエルとアラムは、ユダとともに三国同盟を結んでアッシリアから独立しようと計画した。ところがアハズがこれを拒否したため、アラムとイスラエルの連合軍は、エルサレムに攻め上り、アハズを滅ぼそうとしたのである。

2 エフライム イスラエル王国のこと。ヨセフの子から出た部族名であるが、初代の王ヤロブアムがエフライム人であったことから、イスラエルの代表名に用いられるようになった。

3 シェアル・ヤシユフ 「残りの者が帰って来る」の意

味で、神の徹底的なさばきと、その後の一方的な恩寵による救いを象徴している。イザヤはこの名を持つ息子を連れて王の前に立つことにより、彼のメッセージの中心を思い出させようとした。上の池の水道の端、布さらしの野への大路 エルサレム城外の東側にあった。布をさらすためには大量の水を必要とし、ソーダと灰汁あくのため悪臭を伴うので、城外の水路で行われた。ここにギホンの泉と呼ばれる地下からの間欠泉があり、それが上の池と下の池に分かれて流れて行く。水の少ないエルサレムにとって籠城のために水源確保は絶対不可欠であった。アハズはその調査のために、ここに来ていたのであろう。

4 気を確かに持ち、落ち着いていなさい。恐れてはならない。これは旧約聖書を貫く重要なメッセージである。気を確かに持ち 「見守る」(ハ)シャーマル から派生した語で「注意する」「心に留めとめる」の意味。つまり真の助けはどこからくるのかに意識を集中させよということ。落ち着いていなさい 「休む、横たわる」(ハ)シャークト から派生し、「落ち着く、静かにする、黙る」の意味(イザヤ30・15)で、神に絶対的に信頼することにより、心の平靜さ、落ち着きを持つようということ。恐

れてはならない この言葉の背後には、エジプト脱出時、絶体絶命の状況下で主がモーセを通じて命じた言葉がある（出エジプト14・13）。イスラエル人は、これまでに、何度となく危機的な状況に直面しては、この言葉を聞いてきた。そしてその度に彼らは信仰の原点に帰り、生きて働かれる神に信頼するよう励まされたのである。

6 タベアルの子 だれのことかは分からない。

9 エフライムのかしらはサムリア、そのサムリアのかしらがレマルヤの子だから この後には、次の言葉が続くことが予想される。「ユダのかしらはエルサレム、エルサレムのかしらはダビデの子（アハズ）、そしてダビデの子のかしらは主なる神である」。

11 しるしを求めよ これは「神に信頼せよ」とほとんど同義であるといえる。主はアハズの信仰を励ますためにしるしを求めよう命じた。しるし（**ハ**オース）は、あることが必ず成就することを証明する出来事。

12 アハズ王は主の命令を体よく断った。彼は直面している危機を克服するのに、神の助けを必要とせず、自力で解決できると考えていた。それはアラム・エフライムに対抗するためにアッシリアと手を結ぶことであつた。

彼は申命記6・16から引用して、いかにも敬虔らしく断っているが、その背後には不信と罪を悔い改めようとはしないかたくなな心があつた。

14 処女（**ハ**アルマー）聖書では九回用いられているが、既婚女性の例は一つもない。これ以外に処女を表す言葉があるが、既婚女性についても用いられている。ゆえに、この語が使われているのは、処女であることの強調のためといえる。また、この「処女」が誰のことを指しているのかについて諸説あるが特定できない。インマヌエル「神はわれらとともにおられる」の意味。この男の子の誕生は神が保護者としてユダの国とともにおられることを意味する。この究極は神が人となられたこと（受肉）である。この預言はイエスの奇跡的誕生（処女懐胎）において完全に成就した（マタイ1・22〜23）。

15〜16 凝乳と蜂蜜 これは貴重な食物であるが、アッシリア軍によつて国が荒廃し、農耕生活を営めなくなった結果である。

参考図書 鍋谷堯爾「イザヤ書」『新聖書注解・旧約3』（いのちのことば社）、樋口信平「イザヤ書Ⅲ注解「1」」（一粒社）、他。

聖書

イザヤ9・1-7

タイトル

救い主誕生の預言

暗唱聖句

ひとりのみどりごが私たちのために生ま

れる。ひとりの男の子が私たちに与えら

れる。
イザヤ9・6

目標

私たちのために生まれた救い主を信じ

導入

(土屋開夫)

先週からクリスマスを待ち望むアドベント(待降節)に入っています。ところでこのアドベントの時期には、よくこのイザヤ書が開かれます。聖書(特に旧約聖書)には「預言書」というのがたくさんあります。このイザヤ書も代表的な預言書のひとつです。そして、このイザヤ書には救い主(メシア)の預言が特にたくさん、また詳しく書かれているのです。

救い主(メシア)って誰のことですか? そうです。イエス様の事です! このイザヤ書を書いたイザヤさんは、なんと、実際にイエス様が馬小屋で生まれる約七百年も前に、イエス様の事を預言していたのです! スゴ

イです。

でも、別にイザヤさんがスゴイわけではありません。イザヤさんに未来を見通す予知能力があったわけでもありません。本当の神様が、ご自分がしようとされている計画表を予めイザヤさんに教えられたのです。だから、聖書の預言の通りになるのは当たり前のことです。

どんな赤ちゃん?

さて、では早速、そのイザヤ書の預言の言葉を見てみましょう。

「ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。」(6)

「みどりご」って何でしょう? 新しい木の葉っぱは、明るい緑色でツヤツヤ、ピカピカしていますね。その新しい葉っぱのように、生まれたての赤ちゃんや幼な子のことを「みどりご」と言うのです。

でも、この6節の前半のみ言葉を読んだだけでは、「私たち人類のために男の子の赤ちゃんが与えられるのか。フーン、でもそれがどうしたと言うのだろうか?」と思

ますよね。でも、その続きを読むと不思議な事が書いてありますよ。

「主権はその肩にあり」

簡単に言うと、その赤ちゃんはやがて国を治める王様になる、という事です。王様になる赤ちゃん！でも、まだ驚くほどではありません。王様になる赤ちゃんなんて、世界中にいっぱいいるのですから。

でも次です。「その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」

つまり、その王様になる赤ちゃんは「不思議な助言者」です。ちよつとやそつとの不思議ではありませんよ。本当の「不思議」というのは、人間の考えや理解を越えた、神様にしか出来ないことです。その「不思議」で私たち人間に生きる道を教えてくれる羊飼いのような方。

そして「力ある神」です。

「ちよ、ちよ、ちよつと待ってください。その男の子の赤ちゃんっていうのは、神様なの？ 人間じゃないの？ 人間なのに神様？ 神様なのに人間？」そんな方

がいるでしょうか？ そんな方がいるとしたら、それは一人しかいませんね。そう、イエス様です！ ここには「イエス様」の名前は出てきません。けれどもよく読むと、これはイエス様の事だ！とスグ分かるのです。

続いて「永遠の父、平和の君」。私たちをお父さんのように愛してください、本当の「平和」を与えてくださる王様です。

まとめ

このように、救い主であるイエス様は、力ある神様なのに、私たちと同じように小さな赤ちゃんの姿で来てくださいました。それは羊飼いのように私たちを愛して導き、本当の「平和」、神様の「平和」を与えてくださるためなのです！

救い主イエス様のご降誕を心から感謝しましょう！

♪主イエス様いつも私と♪(PW8)

聖書 イザヤ9・1〜7 テーマ 救い主誕生の預言

序論

(石田高保)

ガリラヤからは預言者は出ないとも言われていていますが、神はそこにイエス様を登場させ、光栄を与えられました。イエス様の生まれた時代、ユダヤはローマ帝国によって厳しく支配され、人々は暗闇の中で夜明けを待つように救い主を待ち望んでいました。〈闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝く〉、〈ひとりのみどりごが私たちに与えられる〉という預言は、救い主が世に現れること、男の赤ちゃんとして生まれることを示しています。救い主はどのようなお方なのかを、イザヤが7世紀も前に預言しました。

一、不思議な助言者

助言者とは王の政策決定に強い影響を及ぼす顧問官のようなものです。英語では「ワンダフル・カウンセラー」。私たちは自分ひとりでは解決できない場合、信頼の置ける人に相談するでしょう。アメリカのビジネス界には

「困った時は専門家に聞け」という実に嘘みtainな格言があるそうです。プライドが邪魔をして相談できないことがあるせいからでしょう。困った事態に直面した時どうするでしょうか。まず第一に不思議な助言者である主に今の実情をありのまま申し上げるでしょう。私たちはイエス様に対しても体裁を取り繕って、本当のことを言わないことがあるのではないのでしょうか。しかし打ち明けてなくても主は心の底までお見通しです。イエス様の前では弱音を吐いてもだいじょうぶです。私たちの弱さを先刻ご承知だからです。それでイエス様から駄目だしされたりしません。「たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちよりも大きな方であり、すべてをご存じだからです」(Iヨハネ3・20)とあるように、あなたのことをいちばんよくわかっているのは主です。そういう方がいつもあなたのそばにおられるのです。それだけでなく何でも打ち明けられる信仰の友を持ちましょう。その友を通して主は語って下さいます。

二、力ある神

「力ある神」という表現がありますが、ここは「戦いに強い神」という意味。「強く 力ある【主】。戦いに力

ある【主】、やがて人間となつて来られる救い主は、ずばり神であると言っている（詩篇24・8）。（ミディアンの日になされたように／打ち砕かれるからだ）、これはギデオンに率いられた300人のイスラエル軍が、400倍の12万人のミディアン軍を壊滅させた出来事を引き合いにしています。私たちにとっての戦いは多くの場合、罪に引き込まうとする誘惑との戦いでしよう。主は地上の生涯において、あらゆる罪との誘惑に打ち勝つてくださいました。「イエスは、自ら試みを受けて苦しまれたからこそ、試みられている者たちを助けることができるのです」（ヘブル2・18）。誘惑との戦いにおいて、大能の神であるイエス様に助けを求めたらよいのです。

三、永遠の父

これは「永遠に父であられる方」、いつでもどこでも私たちの父でいらつしやるという意味です。イエス様が父なる神と一体であることが暗示されています。人間の父親は完全とは程遠い存在でしょう。それは自分が父になつてみれば痛感できます。それでも子どもを一人前の大人へと成長させようという親心は持っています。イエスさまは完全完璧な父として、私たちがキリストのかた

ちへ成熟するように、深く関わっておられます。また主は人間の父親をはるかに凌いで泰然自若、ふところ深く、とこしえの岩として支えて下さいます。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろくな。わたしがあなたの神だから」と語っておられるのです。

四、平和の君

英訳では「プリンス・オブ・ピース」、平和という名の皇太子。（戦場で履いたすべての履き物、血にまみれた衣服は焼かれて、火の餌食となる）。イエス様は戦いに強い神であるとともに、平和をもたらず神です（この預言が文字どおり成就するのは終末後の御国においてです）。まず私たちを神と和解させてくださり、神と平和の関係にしてくださいました。その平和を体験したので、身の周りの人との平和を作り出すことができます。神から赦された人は、人を赦すことができますようにされています。また自分が傷つけた人に謝ることができますようにされています。「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです」（マタイ5・9）。「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」というお名前の主を喜びましょう。

研究資料

(中島啓一)

神に背を向け、さばきを警告されても悔い改めず、かえって「神を呪」(8・21)った北王国イスラエルは、領土の大半の喪失と捕囚という「暗黒」(8・22)に追いやられた。イザヤの子らの名に込められた預言のうちの一つ「マヘル・シヤラル・ハシユ・バズ(分捕り物はすばやく、獲物はさつと持ち去られる)」(8・1)が成就したのである。しかしそんな「闇」(2)の中にもイザヤは「大きな光」(2)を見ていた。預言の一つが成就したならば、「シエアル・ヤシユブ(残りの者が帰って来る)」(7・3)の方も必ず成就する。そう信じたであろう彼に、神は「インマヌエル」(7・14)に続く、新しいメシア像(6〜7)をお示しになったのである。

テキスト

1 **ゼブルンの地と／ナフタリの地** これらの地(後述のメギドに該当)は、BC734〜732年のアッシリアの侵入(Ⅱ列王15・29他)で最大の打撃を受けた地域であった。すなわち北王国が反抗の動きを見せたとき、アッシリアは、その地を含む北王国領土の大半を併合し、一部住民

を捕らえ移したのである。北王国に残されたのはサマリアを中心とした丘陵地帯だけであった。アッシリアに併合された地域は、ドル、ギルアデ、メギドという行政区に分けられ、そのそれぞれが**海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリヤ**に該当する。マタイは、イエスのその地域での宣教活動が、預言の成就であることを示す(マタイ4・12〜17)。

2 **大きな光** 第一義的にはアッシリアの圧政からの国土と民の解放を意味するが、預言が究極的に指し示すものは、言うまでもなく罪の支配からの人類の解放と、その解放をもたらす救い主である。「すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた」(ヨハネ1・9)。**見る…輝く** 原語では完了形。預言者の完了と呼ばれる。実際は将来のことも、預言者の目には既に起こったことのようにはっきりと見えているのである。

4 **くびき** 発掘されたアッシリアの碑文では、他国を征服することを「アシユル(アッシリアの神)のくびきを課す」と表現している。**ミディアンの日** 10・26に「オレブの岩でミディアンを打ったとき」とあり、ギデオンの300人の精鋭による戦い(士師7章)を指すと考えられ

る。それは人間の力によらず、神の力に徹底的により頼んだことから与えられた勝利であった。アッシリアからの解放も、それが指し示す人類の救いも、全く神のみわざとして行われることなのである。

5 戦場で履いたすべての履き物 アッシリア兵は革の編み上げ靴を装備していた。血にまみれた衣服 テイル・バルシブ遺跡の壁画によるとアッシリアの軍服は赤だったようで、その色と戦いの悲惨さの両方を表現しているのかもしれない。軍靴や軍服が排除されることは、神の勝利が完全な平和をもたらすことを象徴している。

6 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる 「処女が身ごもっている。そして男の子を産み」(7・14)と預言されている男の子を指す。その子は他でもなく、「私たちのために」お生まれになるのである。不思議な助言者 古代オリエントでは王に助言を与える議官がいたが、この方は王であり同時に助言者であられる。言い換えれば助言者を必要としない王である。力ある神 救い主が神ご自身であるという驚くべき預言。永遠の父 「父」は神のその民に対する関係を指す(詩篇103・13参照)。救い主はご自身の民にとってあわれみに満ちた保護者で

あられる。平和の君 [へ]シャロームは平和の意で、健康、平安、健全、安全といった、欠けるところのない十全性を意味する。救い主はそのシャロームの状態を、神と人との間に樹立してくださる。するとそのシャロームが人と人との間、さらに個人の生活の中にも成立していくのである。

7 ダビデの王座に就いて 救い主はダビデの子孫として生まれるとエレミヤも預言した(エレミヤ23・5〜6)。その通りイエスは、ダビデの末裔であるヨセフの子として誕生された(マタイ1・1)。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる 人間的な目で現実を見るならば、イスラエルの回復、さらにそれが指し示す人類の救いは実現不可能に思える。しかし神の率先と神の熱心によってなされるならば、必ず成就するのである。人間的な知恵や同盟に期待し、神により頼むことなく滅びを招いたことへの反省と警句でもある。「神にとって不可能なことは何もありません」(ルカ1・37)。

参考図書 注解書 鍋谷堯爾(新聖書注解・旧約3)、J. Oswalt (NICOT), J. Watts (Word), その他 The IVP Bible Background Commentary: OT.

聖書

マタイ・18〜25

タイトル

神様とマリアを信じて

暗唱聖句

この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。マタイ・21

目標

救い主として誕生されたイエス・キリストにより、罪赦され、救いを頂く。

導入

(後藤 真)

みなさんはクリスマスが楽しみですか。楽しみですね。でもクリスマスの始まりは決して楽しい、わくわくするようなことではありませんでした。つらい試練の中から始まったのです。

ヨセフの悩み

「どうしてこんなことになってしまったんだろう…」とヨセフは夜も寝られなくらい悩んでつらい気持ちでいました。結婚の約束をしていたマリアのお腹に赤ちゃんがいることがわかったのです。そしてその赤ちゃんのお父さんはヨセフではありませんでした。

聖書の時代、イスラエルでは結婚の約束をしたらだい

たい一年たってから結婚式をして正式な夫婦になるということになっていました。ヨセフとマリアは結婚の約束はしたけれど、まだ正式に夫婦になっていなかったのです。

ヨセフはマリアのことを愛していました。だからマリアに裏切られたのだと思って、シヨックでした。それに旧約聖書の教えでは、そのようなことをした人は石で打たれて殺される事になっていました。ヨセフはマリアが厳しい罰を受けることも願っていませんでした。

「このことはまだみんなに知られていない。そうだが、こつそりマリアと別れよう。そうすればマリアは厳しい罰を受けなくてすむ」。優しいヨセフは、たくさん悩んで、そんなふうになんか決めたのです。

聖霊によって

けれども、そんなヨセフの夢に主の使いが現れて言いました。

「ダビデの子、ヨセフよ。心配しないでマリアを妻として迎えなさい。マリアのおなかの赤ちゃんは聖霊によって宿ったのだ。マリアは男の子を生む。その子をイ

エスと名づけなさい。彼は自分の民をたくさんの罪から救う者となるのだ」

旧約聖書のイザヤ書にこう預言されていたことが、そのとおりになったのです。

「見よ、おとめがみごもつて男の子を産む。その名前はインマヌエルと呼ばれる」

インマヌエルとは神様がわたしたちといっしょにいてくださるという意味です。

マリアを迎えたヨセフ

ヨセフは目が覚めるとマリアを妻として迎えました。ヨセフは二つのことを信じたのです。一つは、神様は聖霊によってマリアに赤ちゃんを与えることができる方だということです。人間には無理でも、神様にはできないことがない、ということです。

もう一つのこととは、マリアは何も悪いことをしていないということ。マリアもこんなことになってとても驚いたろうし、大変だっただろうなあとヨセフはマリアのことを心配しただろうと思います。

まわりの人はいろいろな噂をするかもしれませんが。マ

リアが聖霊によって赤ちゃんをみごもったと言っても、信じない人の方が多いかもしれません。でもヨセフはそういう大変さもぜんぶわかって、マリアといっしょにそれを乗り越えていく決心をしたのです。なぜなら、生まれてくる男の子は、民を罪から救う人になるからです。

みなさんはクリスマスが楽しみですか。楽しみですね。でも、クリスマスはただ楽しいイベントをする日ではありませんね。わたしたちを救うために、神様がイエス様を送ってくださったのです。ヨセフもマリアも自分たちがたいへんになることを知っていたのに、イエス様を受け入れたのです。

罪をゆるしてください。そして罪をゆるしてください。イエス様のために何ができるかを考えてみましょう。

♪主イエス様いつも私と♪インマヌエル♪(PW8)

聖書 マタイ1・18〜25 テーマ ヨセフへの告知

序論

(小泉 創)

世界中で祝われるクリスマスですが、最初のクリスマスに続く道は、誰も関心をもたないところにいた人々、ヨセフとマリアから始まります。小さな存在でしたが、人生をかけて神様に従おうとした彼らから、神様の大きなわざがすすめられていきました。

一、悩めるメサフの日記

マタイは福音書を始めるにあたって、まずイスラエルの系図を指し示し、神様が長い年月、愛と忍耐とをもって歴史を導いてこられたことを語っています。その系図の中には、神様に信頼して従った人々の名前も刻まれています。旧約聖書をひもとけば、私たちと同じように時に悩み、失敗もし、しかし神様に助けられながらその生涯を歩んでいった人々の姿が描かれています。

マリアと結婚の約束をしているヨセフは、ダビデ家の生まれであり、正しい人物でした。神様を愛し、神様の

みところに従おうとしていました。彼はあるとき、マリアの内に新しいのちが宿っていることを知って悩みます。それは婚約者である自分には身に覚えの無い出来事なのです。愛するマリアを疑い、律法に照らすなら厳しい罰を求めなければならないことに悩み、どうすることが神様に従うことになるのかと身悶えして悩んでいます。すっきりした正解はどこにもありません。律法も、マリアをも大切にするために、ひそかに離縁をしようと決心し、さらに思い悩んでいます。

そのようなヨセフのために、神様は夢を通してメッセージを与えました。御使いはヨセフに語りかけます。「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです」と。それはヨセフの考えてもいなかった道でした。

実はマリアもまたヨセフを裏切るどころか、その身に救い主を宿すことを受け入れるほどに、神様を愛し、従っていたのです。神様はこの二人を選ばれて、豊かなみわざをなそうとしておられました。誰も知らないところで、人知を超えた神様のわざはすすめられていました。

二、救い主が来られる

御使いがヨセフに伝えたことは、マリアを通してこの世界に、救い主が来て下さるということでした。イスラエルの人々が待ちわびていたお方がついに来られるのです。「この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです」(マタイ1・21)。

どのように文明が発展しても、人は変わりません。二千年前の人々と同じように、現代に生きている私たちの周りにも罪はあふれています。神様に逆らう傲慢がはびこり、人を人と思わない生き方が存在しています。

正しい神様は、罪ある人を滅ぼすためではなく、愛し、救うために救い主を送ってくださいました。罪を見逃すためではなく、報いを与えるためでもなく、罪の中に死んでいる者たちをゆるし、新しいものとして生かすためにイエス様を送ってくださいました。神様は正しいお方であり、愛なるお方でもあります。イザヤを通して七百年以上も前に約束してくださった救い主イエス・キリスト、「インマヌエル」「神が私たちとともにおられる」という称号を持つ方が来られたのです。

三、聴いて従う

ヨセフは夢から覚めると、神様が命じられたことに従い、マリアを妻に迎えました。そしてこれから生まれてくる赤子をイエスと名付け、育てることを受け入れました。夢で聞いたことを、ヨセフは真実な神様が語られた言葉と信じてその通りに従ったのです。それはマリアと自分の生涯を、神様にささげるといふ決心でもありました。

神様に従う者を用いて、そのみわざは進んでいきます。弱く小さな存在、赤子としてこの世界に来て下さったキリストは、このふたりに委ねられました。それは分け隔てなくすべての人に救いの道を与えるための、神様からの大きな贈り物だったのです。

結論

私たちはこの年、どのようなクリスマスマスを迎えるのでしょうか。ヨセフとマリアの信仰と献身を心にとめましょう。イエス・キリストという大きな贈り物をいただいた私たちも、神様の愛の呼びかけに応えて、自分自身をおささげすることを心に決めましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキストト

18 イエス・キリストの誕生 「誕生」は〔ギ〕ゲネシス(起源、家系などの意も)。ちなみに1節の「系図」は〔ギ〕ゲネシスの書(ギ)ビブロス」。その系図(1〜17)の焦点であったイエスの誕生の詳細がここから語られる。婚約いくつかの制限を除いては夫婦と同等に見なされる公式な関係。夫、妻という表現はそのため。その制限の一つは性的関係を結んではならないこと。一般に一年ほどの期間を経て正式な結婚へと進む。その間に女性が他の男性と関係を持てば姦淫かんえんと見なされた(申命記22:23以下)。

一緒にならないうちに 正式な結婚へと進む前。聖霊によって身ごもって 神的存在が人間と関係を結ぶという異教的な概念はここにはない。1、18節で用いられている〔ギ〕ゲネシスには「創世記」の意もあり、そのことが象徴的に示すのは、神の創造のわざがマリアの胎内になされたということである。天地創造のとときと同じように、救いのわざなる新創造に際しても聖霊が働かれるのである。なお聖霊による受胎(18、20)の「〜によって」を

表す前置詞(ギ)エクは、1〜17節の系図においても、「ボアズがルツによってオベデを生み」(5)のように、その中に登場する四人の女性と共に用いられている。このことから、マタイは「ヨセフは聖霊によるイエスの父」と言いたかったのだと主張する注解者もいるが、あながち的外れでもないと思う。ヨセフがイエスの父というのは名ばかりのことでは決してない。ヨセフはその従順な信仰によって、イエスの単なる名目上の養父ではなく、彼にダビデの子孫としての地位を与える重要な役割を果たす、地上での父親とされたのである。

19 夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしたくなかったので 「正しい」(ギ)ディカイオス)は律法に對する正しい態度を指す語。律法に忠実であろうとすれば、マリアの姦淫の容疑を世に明かし、彼女に裁きと処罰を受けさせねばならない(石打ちの刑。ただし当時それほど厳格には適用されていなかったようである)。ヨセフはマリアをさらし者にしたくなかった。とはいえ明らかに有罪と思われるマリアを妻に迎えるならば義が通らぬ。その葛藤の中で到達した答が、ひそかに離縁すること。マリアの同意さえあれば一人の証人の前で公

式に離縁することが可能であった。このようなヨセフの葛藤^{かつらぎ}の姿は、律法に基づく神の前での正しさと、隣人に対する慈しみとを同時に示すものであった。

20 **ダビデの子ヨセフ** 新約でダビデの子という表現がイエス以外に用いられるのはここだけである。

21 **その名をイエスとつけなさい** イエス^(ギ)イエスー^(ス)は、^(ハ)イエシユア(ヨシユアの短縮形)のギリシヤ語読み。この方が**ご自分の民をその罪からお救いになるのです**。その名は「主は救い」の意。救い主に対する当時の一般的な期待は政治的な救いであったが、イエスがもたらす救いは「罪から」の救いなのである。

22 **主が預言者を通して語られたことが成就するため** 神が預言者を通して語られた救いの計画の成就として、救い主は誕生する。続く節はイザヤ7・14の引用。メシア預言には、それが第一義的に指し示すもの(ここでは、アハズに語られた当座の救い)と、究極的に指し示すものがある。その究極の約束が、今や成就するのである。

23 **処女が身ごもっている** ^(ギ)パルセノスは「処女」の意だが、イザヤ書の^(ハ)アルマは「若い女性」の意。よってイザヤの預言は処女降誕を意味するのではないと主張

する者もあるが、その預言の究極の意味での成就を記すこの個所で^(ギ)パルセノスが用いられ、天使を通してその受胎が聖霊によるものと断言され(18、20)、さらにマリヤも「私は男の人を知りません」(ルカ1・34)と語ることなどを総合するときに、マリヤの処女懐胎は、聖書全体がはつきりと指し示すものであると受け止めるのは当然である。**インマヌエル** 個人的な名ではなく、その役割を示す称号的なもの。神の御子が人となることによって「神が私たちとともにおられる」という主の臨在が実現し、イエスの名が指し示す主の救いが実現に至るのである。最初の章からインマヌエル(神の臨在)を語るこの福音書が、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(28・20)という臨在の宣言で締めくくられるのは偶然ではない。

25 **子を産むまでは彼女を知ることがなかった** 「知る」は性的関係を表す表現。このことは処女降誕の事実をさらに疑いがないものとする。

参考図書 注解書 D. A. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible), 増田誉雄(新聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ2・1〜12

タイトル

王なるキリストを迎える

暗唱聖句

ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。マタイ2・2

目標

キリストを王として心に迎える。

導入

(土屋開夫)

皆さん、クリスマスおめでとうございます！

「クリスマス」というのは「キリストの礼拝（ミサ）」という意味です。ですからキリスト・イエス様を礼拝するのが本当のクリスマスです！

今から約二〇二三年前（数年の誤差あり）、天から来られた赤ちゃんイエス様を、最初に拝みに来た人たちは誰でしたか？ そう、羊飼いたちですね。

では、その後にイエス様を拝みに来た人たちは誰でしょう？ そう、東の国の博士さんたちですね。

羊飼いたさんと東の博士さんでは、全く違うタイプの人たちですね。

羊飼いたさんは、①ユダヤ人（近くの人）、②貧しい人、③身分の低い人、④いつも羊を見てる人。

東の博士さんは、①異邦人（遠くの人）、②お金持ち、③身分の高い人、④いつも星を見てる人。

ね、全然違いますね。でも、共通する事が一つあります。それは「救い主を求めていた」という事です。イエス様は、どんな立場の人でも、救い主を求める世界中の全ての人の本当の王様なのです！

神様の時計

さて、東の博士さんたちは、何の博士かと言うと、星を研究する博士でした。

ところで皆さん、針の時計（アナログ）の中を見た事がありますか？ たくさんの小さな円い歯車まろがカチコチと回っています。そうして「時」を刻んでいるのです。

宇宙もこの時計に似ていると思いませんか。宇宙の星たちも星座も、円を描いて動いています。また宇宙にはたくさんの銀河があって、それらはまるで大きな時計の歯車まろのようです。つまり宇宙全体が、神様の大きな時計のようなものかも知れません。宇宙の星たちは、神様のご計画（タイムスケジュール）を刻んでいるのです。

東の博士たちは、いつもこの宇宙という神様の大きな

時計を見つめていました。だから、いつもと違う大きな星の輝きを見つけた時、「これはきつと神様の大きなご計画の知らせだ！」と感じたのです。神様の一番大きなご計画と言え、イスラエルの人たちが昔から話していたメシア（救い主）が来られたに違いはない！この宇宙を支配しておられる真の神様の御子が来られたのだ！とピンと来たのでしょうか。この救い主を自分たちの全ての力を使ってでも会いに行きたい、拝みたいと思ったのです。

本当の王様

ところで皆さん、私たち人間には必ず「王様」が必要なのです。別の言い方で言うなら「羊飼ひ」が必要なのです。羊飼ひのように私たちを導いてくれる良い王様がいれば、私たちはとても幸せで安心です。

東の博士たちは、「お金」もたくさん持っていました。「知識」もたくさんありました。偉い「身分」もありました。でも心は満たされず、空しく、心に大きな穴が空いていたのでしょうか。

けれども大きな星を見つけた時、「私の心を照らす大

きな光だ！私の王様が生れたのだ！」と思ったのです。

さて、博士たちがエルサレムに着いた時、まずヘロデ大王に会いましたが、この人は本当の王様ではありませんでした。この世の国の王様は、私たちの本当の王様ではありません。本当の王様は、神の御子イエス様です！だから博士たちもこう聞きました「あなたじゃなくて」ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」

そして神様の時計の針がちゃんと教えてくれました。星に導かれ、博士たちは本当の王様を見つけ、ひれ伏して礼拝し、一番の宝物を献げました。そして、この上もない喜びと幸せに包まれました。

まとめ

あなたの「王様」は誰ですか？この神の御子イエス様をあなたの王様として、心から礼拝して生きる時、あなたの心を大きな光が照らし続けるのです！

クリスマス、おめでとう！

♪われらは来りぬ♪（新聖歌96）

聖書 マタイ2・1～12 テーマ 王なるキリストを迎える

序論

(小泉 創)

今やどこかに行くとき、ナビゲーションシステムは欠かせません。自分が今いる場所がわかり、目的地までどのように進めばよいかを教えてください。しかし人生はそのようにはいきません。それでも神様から遠く離れていた私たちがいろいろな道筋を通りながらも、今神様のもとにいるのは、不思議な神様の導きがあったからにほかなりません。今年のクリスマスも、ひとりでも多くの方がキリストのもとに導かれることを期待します。

一、期待と不安

東の国から博士たちの旅を導いてきたのは星でした。博士たちがどの国から来たのか、何人であったのか、詳しいことについて聖書は沈黙しています。彼らは私たち異邦人の代表として、キリストのもとに導かれてきました。彼らはユダヤ人の王として生まれた方に出会うことに期待し、希望をもって旅をしてきました。

星に導かれてエルサレムにたどりついた博士たちは王宮に向かいます。ユダヤ人の王の誕生についてたずねた博士たちにキリストをはっきりと指し示したのは、神の民に与えられていた聖書の預言でした。

「ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で／決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。」(マタイ2・6)

せっかく聖書の言葉を与えられていたのに、エルサレムの人々は、靈的に鈍感になっていました。自分たちのすぐそばにキリストが来られたことを知っても喜びません。ヘロデは自分の地位をおびやかすキリストの出現に不安を感じています。彼は神の民の国の王でありながら、神をおそれる気持ちはなく、自分が神のように扱われるのを望んでいました。そしてエルサレムの人々も残酷な王ヘロデの一挙手一投足に不安を感じるだけで、自分たちを救うために来て下さるキリストに期待することすら忘れていました。神の民が目の前の出来事にばかり気をとられ、神様のなさることに期待することを忘れてしまつて良いのでしょうか。

二、ベツレヘムに來られる王

ベツレヘムはダビデ王の生まれた町です。そこにキリストが来て下さることを、律法学者たちは理解しました。本来は、神の民全員に告げ知らされるべきよき知らせは、ヘロデに伝えられました。ヘロデは東方の博士たちを「ひそかに」呼んで、博士たちから星が現れた日を聞き出し、キリストのいのちを奪うことをたくらみました。そしてその王によって無関係の多くのこどもたちのいのちが奪われたのです。神様を信じない世界で力をふるう人々は、自分の保身や欲望のために人を利用することも、命を奪うこともためらいません。しかし弱く小さな者たちの嘆きの声を、神様は聞いて下さっています。奪い取る王ではなく、自らの命さえも与え尽くして下さる真実の王が私たちのもとに来てくださったのです。

三、救い主への礼拝

星に導かれて異国の地にきた博士たちは、ベツレヘムでついにキリストと会うことができました。その喜びはいかばかりだったでしょう。きらびやかな王宮ではなく、暗く小さなところに生まれてくださった方から、新

しい時代が始まるうとしています。博士たちは幼な子をひれ伏し拝み、携えてきた贈り物をささげました。それぞれの宝物はキリストがどのようなお方であるかをあらわしていると言われます。黄金は王であるキリスト、乳香は神であるキリスト、没薬は苦しみを受けて下さる救い主キリストです。

使命を果たした彼らを、神様は守ってくださいました。夢を通して、ヘロデのもとに行くことをとどめられたのです。博士たちはその導きに従って他の道をとおって、無事に自分たちの国に帰っていきました。博士たちの礼拝は、すべての人がキリストのもとに来るさきがけとなりました。

結論

私たちもキリストと出会う道へと導かれてきました。さらには、キリストの元にとどまり、キリストと共に歩むこともゆるされています。何という恵みでしょう。一杯の礼拝をささげ、すべてをキリストのものとしていただきましょう。

研究資料

(中島啓一)

東方の博士たちの出来事は、救いがユダヤ人だけでなく、全ての民に注がれる恵みだということを示す。

この場面には二人の王が登場する。この世の王ヘロデと、まことの王としてお生まれになったイエスである。自分の王位にしがみつき、まことの王を拒むヘロデと、まことの王の前にひれふす博士たち。この両者の正反対の姿が、この章の重要なポイントと言える。すなわち、この恵みをもたらす救い主を前にするとき、人は彼を受け入れるか否かで、自ずと二つに分けられるのである。

テキスト

1 ヘロデ王の時代 ヘロデ大王は紀元前4年に没している。16節で「二歳以下の男の子をみな殺させた」ことから、イエスの誕生は紀元前5、6年頃と推測される。ちなみに西暦(紀元前「BC」)キリスト以前、紀元「AD」(主の年)は、ローマの神学者ディオニシウスにより、キリストの誕生を基準にして6世紀に定められたが、その時代の知識が限定的であったことなどから、実際には数年のずれが生じたようである。**ユダヤのベツレヘム**

エルサレムから約8キロ南。ダビデの故郷であり、「ダビデの町」(ルカ2・4)と呼ばれる。東の方から博士たちが「博士」(ギマゴス)は後に魔術師の意になるが、その時代にはその意味はなく、「(天文に通じた)賢者」の意であった。「東」はアラビア、ペルシヤなど諸説あるが、大規模なユダヤ人社会が形成されていたバビロンが有力な候補である。いずれにしてもユダヤの宗教・文化が広く知られている地域であり、博士たちもその影響を受けていたのだろう。伝統的に3人とされるのは、贈り物が3種類であったことからの類推に過ぎない。**エルサレムにやって来て** ユダヤの新しい王に会うのに、王宮のある都がふさわしいと博士たちが考えたのは、当然である。

2 ユダヤ人の王 マタイでは他に受難記事(27章)であざけりの意で用いられるのみ。ヘロデが4節で「キリストは…」と言い換えているように、預言に基づいて待望されてきた「救い主」を指す表現。ただし、当時の救い主に対する期待は政治的なものであり、その期待が外れたゆえに、受難におけるあざけりにつながっていくのである。**その方の星** ハレー彗星(BC12年)であると

か、794年に一度、金星と水星が魚座の中で接近する天文事象（BC7〜6年）であるなどの説明があるが特定はできない。より大切なことは、自然現象であれ超自然的なことであれ、偶然ではなく神の導きによってなされたということ。礼拝するために来ました。「こうしてすべての王が彼にひれ伏し／すべての国々が彼に仕えるでしょう」（詩篇72・11）との預言の成就と言える。彼らの明快な態度は、次節以降の人々と極めて対照的である。

3 ヘロデ王は動揺した ヘロデはユダヤ人でなく（イドマヤ人）、ローマの後押しで王位を得たことから不人気であった。それゆえ預言に基づく救い主の誕生は脅威であったであろう。エルサレム中の人々も：民の不安はヘロデのそれとは異なり、王が残虐な行動を起こすのではないかという恐れであったかもしれない。

4 祭司長たち、律法学者たち 彼らは旧約の預言に通じてはいたものの、それに対するふさわしい応答をすることができなかった。

5〜6 ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で／決して一番小さくはない 「…あまりにも小さい」（ミカ5・2）が「決して一番小さくはない」

となつている。預言の成就に伴って、本来の意図が前面に出てきたと解釈して良いだろう。あなたから治める者が出て：Ⅱサムエル5・2の引用。

7〜8 ヘロデは：ひそかに呼んで：私も行って拜むから イエス殺害の意志を抱き、そのために博士らを利用しようとする策略家ぶりが表れている。

9 あの星が、彼らの先に立って進み：その上にとどまった 星がどのように動いたかは具体的に想像しにくい。より大切なことは、彼らを救い主探訪の旅にいなした主が、最後まで確かな御手をもって導かれたと言うことである。

11 ひれ伏して礼拝した：黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた 古代東方において、贈り物は服従と忠誠を示す行為であった。教父たちやルターは、三つの贈り物に、イエスの王権（黄金）、神性（乳香）、受難（没薬）の意味を見いだす。

12 夢で：警告されたので：一切は徹頭徹尾、神の摂理によって導かれた。主の計画はこの世の王でさえ妨げることのできないのである。

参考図書 12月17日分と同じ。

聖書 □□サイ3・15〜17

タイトル 感謝の生活

暗唱聖句 感謝をもつて心から神に向かつて歌いな

さい。 □□サイ3・16

目標 キリストにより感謝と賛美に満ちた生活を
する。

導入

(後藤 真)

今日は一年の終わり、最後の日です。楽しかったこと、がんばったこと、しかられたこと、失敗したこと、うまくできたこと。いろいろなことがありましたね。この一年を感謝の気持ち終わることができたらすばらしいなあと思います。

おたがいに感謝

感謝というのは、「ありがとう」の気持ちを表すことです。心の中で思っているだけではなく「ありがとう」とことばで言ったり、行いで表したりすることです。では、わたしたちはだれに感謝するのでしょうか。まず教会に来ていたわたしたちお互いです。

わたしたちは、イエス様に愛され、イエス様に選ばれ

たお互いです。イエス様にいただいたように、愛し

あい、ゆるしあうように言われています。ひとりだけで

イエス様を信じていても愛しあうとかゆるしあうとかい

うことはよくわかりません。愛しあえる人やゆるしあえ

る仲間がいるからイエス様の愛とゆるしがよく分かるよ

うになるのです。

「いつもお祈りしてくれてありがとう」

「助けてくれてありがとう」

「いっしょに教会学校にきてくれてありがとう」

そんなふうにお互いに感謝してみましよう。イエス様の

愛がもつともつと分かるようになりますよ。

感謝の礼拝

わたしたちお互いが感謝できるのは、神様がいてくださるからです。神様に感謝することも忘れてはなりません。神様に感謝するにはいろいろなやり方があります。今日、今日の聖書では、神様に賛美をささげ、礼拝して感謝することが教えられています。

礼拝なんてめんどうだなあ。牧師先生の話が長いから

退屈だなあ、なんて思うことはありませんか。でも礼拝

は神様に感謝をあらわすのにとってもいいチャンスです。

なぜなら礼拝は、他のことを考えずにただ神様のことだけ考えることができる時間だからです。

イエス様はわたしたちのために十字架にかかってくださいました。いのちまで捨ててくださったのです。神様はひとり子イエス様を十字架にかけてまでわたしたちを愛してくださったのです。どんなに感謝しても足りないくらいの愛をいただいているのです。

それなのに、わたしたちはそれほど神様やイエス様に感謝することがありません。ふだんは学校の勉強や宿題が忙しかったり、動画を見たりゲームをしたりする方が楽しかったりして、神様のこともイエス様のことも忘れてしまうのです。でも礼拝の時間は、神様に集中できる時間です。

心から賛美を歌ってみましょう。牧師先生のお話も一生懸命聞いてみましょう。神様のこと、イエス様のことだけを思って礼拝してみましょう。神様への感謝が心にあふれてくるでしょう。

よびのいのちへの感謝

今年一年を思い出してみるとき、自分だけの力でいたことは何もないなあと思います。わたしたちが生きてい

るこの世界はすべて神様が造られたものであり、わたしたちが何をするのにも神様なしではできないということ忘れてはいけないと思います。

「感謝できることがあったら感謝しよう」

というのはいい心がけです。でももっとよい心がけは、

「どんなことにも感謝できることを見つけよう」

ということです。感謝をすることは、特別なことではなくて、イエス様を信じている人のふだんからの生きかたなのです。

一年の終わりです。教会の人に感謝したいこと、家族や学校の友だちに感謝したいこと。いろんな感謝を見つけてください。そして「ありがとう」と言ってみてください。そして神様への感謝もたくさんがしてください。いつものお祈りでは「お願い」が多いかもしれませんが。でも今日は、ただ神様に感謝するだけのお祈りをしてみるのもいいかもしれません。

来年も感謝いっぱい過ごせるように、「ありがとう」とたくさん言えますように！

♪両手いっぱいの愛♪

(PW13、ホ146、イン41、イン新49、新聖歌483)

聖書 コロサイ3・15～17 テーマ 感謝の生活

序論

(石田高保)

一年の終わりを感謝で締めくくることがクリスチャンにとってふさわしいことです。世の中では、年忘れと称して宴会が催されますが、私たちは神の良くして下さったことを忘れず、心に刻み、明日への希望とすることが出来ます。これまで良くして下さった神は、これからも良くして下さるに違いないからです。

一、なぜ感謝するのか

この個所では、感謝しなさい、という言葉が三度使われています。事あるごとに神様に感謝することは、クリスチャンのライフスタイルであり、基本的な生活の姿勢です。神が私たちと結んで下さった救いの契約は、永遠に変わらぬ真実に貫かれています。言いかえれば、こっちが態度を変えたからといって、神様は決して態度を変えなさらないということです。きのうの神は今日の神であり、どこまでも真実をもって追い求めて下さる熱いお方なのです。「まことに 私のいのちの日の限り／いつ

くしみと恵みが 私を追って来るでしょう」(詩篇23:6)とあるとおりです。

私たちはこれまで大小を問わず、何度悩みの中を通過してきたことでしょう。アダムによって墮落した世界に生きている限り、生老病死と言われる苦しみはクリスチャンであるからといって免れるものではありません。祈ったからといってすぐに悩みから解放されるわけでもありません。しかしやがてそれが取り去られるか、こちらが悩みを克服したときに、解放の喜びに与ります。過去の悩みを振り返って、共に戦って下さった神への感謝がこの個所に込められているのではないのでしょうか。

二、神との関係を感謝する

また、神様が私たちに敵対することは一瞬たりともありません。私たちのすることなすことをなにもかも是認されるわけではありませんが、私たちの存在は途切れなく受け入れ続けておられます。罪を憎んで人を憎まずとあるように、神様は私たちの悪い行いは憎まれますが、私たちが自体を憎むことはなさいません。その意味で神の愛が自分に注がれ続けるのをせき止めることはできないのです。その愛の泉が湧き上がるのを決して押さえつけ

ることもできません。もし神様から愛されていないように感じるとしたら、それはたいへんな誤解です。自分を不必要に責めているか、自分で自分を赦していないのかもしれない。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう(ローマ8・31)とあるように、主の十字架のゆえに神様との間に和解は完成しているのです。この大いなる事実のゆえに神様に感謝しましょう。

三、すべての事を感謝する

さらに「すべてのことにおいて感謝しなさい」(1テサロニケ5・18)とあるように、これを実行すれば私たちの霊は健やかになり、奮い立たせられます。「すべて」の中には大感謝もあり、ちょっとした感謝もあり、にわかには感謝したい出来事もあるでしょう。むしろちょっとした良い変化について感謝することが、ますます神に依り頼む心を育むのです。小さいと見えることに感謝すればするほど、ゆくゆくは「すべてのことにおいて感謝」することにつながってゆくのではないのでしょうか。「すべて」とは例外なくという意味です。小さい変化を喜ばない人は、大きな変化を期待することはできないでしょう。

雑事の中に神は住まわれることを覚えたいと思います。

さらなる感謝の達人は、まだ起きていない出来事について感謝してしまう人です。その最たるモデルはイエス様で、ラザロの墓の前で「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します」と祈っておられます(ヨハネ11・41)。もし何も起きなかつたらどうしようなどと心配している気配は微塵もありません。すでに叶えられたと受け取っておられます。これは先取りの信仰とか、領収証の祈りとか言われるものです。そういうことは神の子だからできたので、私たち凡人にはできないなどと祭り上げてはいけません。なぜなら主は「あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります」と私たちに断言しておられるからです(マルコ11・24)。原則としてイエス様にできたことは私たちにもできるというのが聖書的な信仰の基準です。

結論

年末にあたり、感謝であったことを書き出してはどうでしょうか。また家族や信仰の友と感謝を分かち合ってみましょう。きっと喜びは倍になることでしょう。

研究資料

(辻林和己)

コロサイ人への手紙の前半1章と2章は、主イエスによる救い、福音の内容、神様の愛、主イエスの恵みがどれほど大きなものであるかということ等が記されている。3章の前半(1〜17節)で、パウロは主の恵みに応えてどのように生活するかを語る。1〜4節は、「上にあるもの、すなわち天におられるキリストを求めるところ」、5〜11節は「古き人を脱ぎ捨て、新しき人を着たこと」が語られている(ここでの「着る」は「性質を受け継ぐ」という意味がある)。

今回与えられた聖書箇所は15〜17節であるが、ここでは12節から読む。

テキスト

12 パウロは10節で言及した「新しき人」の特質、その徳目の奨めを17節まで積極的に説く。神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者。パウロはコロサイ教会の人たち(手紙の読者)に、主の恵みによって自分たちがどのような立場にされた者であるかを想起させている。深

い慈愛の心、∴、寛容 これらの五つの徳目は「御霊の実」である(ガラテヤ5・22〜23、エペソ4・2参照)。

13 互いに忍耐し合い、∴、互いに赦し合いなさい 前節の五つの徳目に続いて、互いに忍び合うことと赦し合うことの二つが人間の相互関係の具体的徳目として勧められる。

14 愛は結びの帯として完全です 12〜13節で述べたすべての徳目の上に愛を加えることを勧める。パウロの理解によれば、愛(ギ)アガペー)は、倫理の基本原理であり、すべての道徳律の集約である(ローマ13・10、ガラテヤ5・14参照)。ここでは愛が、「身に着けた」ばかりの「衣服」を、一緒にまとめて結ぶ帯にたとえられている。前述の徳目が内住のキリスト(コロサイ1・27)とともに分与される愛によって結び合わされるのである。

15 キリストの平和 「平和(ギ)エイレネー」は、「平安」とも訳される言葉。罪人であった私たちが、キリストによって罪赦され、神との和解をいただき神の愛のふところの中にあることができる。これはキリストによって与えられる「平和」であり「平安」である。支配する(ギ)ブラビユーオー)は元来、「審判員が」競技の審判を

する」という意味の言葉。直訳すると「キリストの平和にあなたがたの心の中で（感情や思いを）裁定させよ」。そしてキリスト者はキリストによって神と和解しただけでなく、人間同士の間でも平和をつくり出すように召し出されている（マタイ5・9参照）。**召されて一つのからだとなった** キリスト者として召し出され、新しくされた者は、キリストと一つにされている。

16 キリストのことば キリストによって語られた言葉、キリストについて語られた言葉の両方を意味する。どちらにしても啓示された福音の言葉を示す。**あなたがたのうちに豊かに住むように** 住む（ギ）エノイケオー）は「中に住む、内在する」を意味する。ここでは主の言葉を心の奥深くに留める、内在させること。**互いに教え、忠告し合い** これらは12〜15節の互いの救いと信頼関係を前提としてできることである。**詩と賛美と霊の歌** 「詩（ギ）プサルモス」は賛美の詩、特に旧約聖書の詩篇の詩のこと。英語の psalm の語源。「さんび（ギ）ヒュムノス」は賛美歌、神をたたえる歌のこと。英語の hymn の語源。これらの三つの賛美の形態ははっきり区別することが難しい。詩篇の詩や新たに作られた賛美歌を指す

のであろう。「これらの三つの用語は、クリスチャン賛美の多様さ、豊かさを示している」（N・T・ライト）。**神に向かつて歌いなさい** ほめたたえる（ギ）アドー）は「歌う、（神を賛美して）ほめ歌う」という意味。

17 本節は、今まで述べてきた2・6からの奨励のまとめのような箇所。**主イエスによって父なる神に感謝し** 十字架と復活によって私たちの救いと神との和解を成して下さった主イエス。このお方、主ご自身が私たちの感謝の理由である。そして、私たちはこのお方を通して父なる神に感謝をささげることができる。**すべてを主イエスの名において行いなさい** 何事をするにも主イエスの御名が崇められるために行う。

参考図書 宇田進「コロサイ人への手紙」『新聖書注解』（いのちのことば社）、N・T・ライト「コロサイ人への手紙」『テインデル聖書注解』（いのちのことば社）他

牧羊ひろば



熊本真愛教会 教会学校

●はじめに

熊本真愛教会は、熊本市東区にあります。東区は、二〇一六年の熊本地震で震度7を記録した益城町、西原町に隣接しており、大変被害が大きかった場所です。本震に襲われた夜、筆者含む牧師一家は近くのシヨッピングセンターの駐車場に車で避難しました。揺れる車の中で、筆者はCSに来ていたうちの、小学6年の二人の子たちとLINEでやり取りしました。「こわい、神様、助けてください」と言うその子たちに、「大丈夫、神様と一緒にいる。神様を信じて神様と一緒に乗り越えるんだ!」と返信すると、「はい! アーメン」「アーメン」と二人から返信が来ました。涙を流しながらの生涯忘れられないやり取りです。そのうちの一人は、今年高校を卒業し、CSの教師になりました。私たちが取り組んできたことは、決して充分とは言えませ

ん。しかし、イエス様が愛されたように一人の子どもを心から愛する、ということを目指して取り組んできました。

●実際の取り組み・礼拝

現在のレギュラーメンバーは、幼稚科から中高校まで10名。イレギュラーで5〜6人増えることも。教師は11名。CS礼拝は、現在は午後1時半から行っています。幼稚科から中高校まで合同です。ゴスペルソングを元気に賛美して、賛美の中でみんなで挨拶タイム。奏楽が流れる間に、一人一人挨拶して握手をします。あなたと一緒に礼拝できることがうれしい、さあ一緒に神様を礼拝しよう! という意味を込めていて、みんなの心が神様に向く大切な時間です。そのあと、ゲーム、主の祈り、献金、今日のみ言葉暗唱タイム、メッセージです。メッセージだけ、ミニキッズ（小学3年まで）と、キッズ・ユース（小学4年〜中高生）の二つに分かれて行っています。年代に合わせたお話で恵まれるようにと願っています。現在、幼稚科さんが少しずつ増えているため、4歳くらいまでのミニミニキッズ向けメッセージも必要、と考えています。



コロナ禍前のイースターまつりに集まった子どもたち（二〇一九）

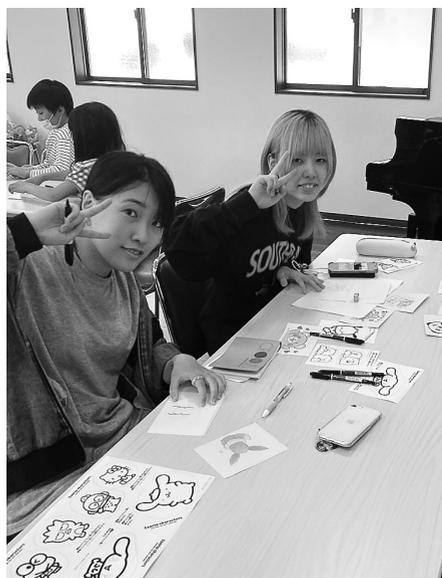
● 実際の取り組み・イベント

昨年で創立40周年。私共が赴任する以前から、牧師先生方や教師の皆さんはCSに力を注いで来られました。地域に種蒔きがなされてきたので、イベントには多くの子どもたちが参加してくれれます。4月はイースターまつり。イースターを盛大に。最も動員数が多いイベントな

ので紹介しますが、一部は礼拝堂でゲームやイースターメッセージ、二部は教会の敷地内で、輪投げ（景品あり）、お菓子すくい、手作りパフェ、オリエンテーリングにガチャコーナー、ビンゴ等々、様々なコーナーを作り来場者に楽しんでもらいます。



クッキー作り（5月）



フラ板工作（6月）

5月はサンクスデー・クッキー作り。6月はサンクスデー・フラ板キーホルダー作り。5、6月とも母の日、父の日イベントですが、片親の子も多いのでサンクスデーとしています。7月はサマーキャンプ。8月はアイスパークティー。教区ユースキャンプ。ユースメンバーは、キャンプでの賛美チームに加わって演奏の奉仕をしています。9月は振起日パーティー。11月は教会

主催の餅つき会に、子どもたちを呼びます。12月はキッズ・クリスマスフェスタ。1月はすごろく大会。3月進学進級祝いのバーベキュー。今後企画しているのは、生徒がCS教師の皆さんに感謝する時を持つとう、昼食を作って先生方をおもてなししよう！ というもの。教師と生徒の愛の交わりが深まったらと願っています。



進学・進級式

●生徒から教師へ

ユースメンバーですが、毎年、礼拝は皆勤です。主の憐れみです。メンバーは極力日曜に活動のない部を選んだり、日曜に活動があるときは早朝礼拝か夕礼拝を必ず守ります。幼い時から、神様と個人的に深く関わり、救われ、神様の恵みを知ること。教会でのメンバー同士の交わり、牧師や教師たちとの交わりを深めて、教会が欠



ユースバンドによる賛美奉仕

かせない楽しい交わりの場になり、ここが自分の居場所と思ってもらうこと。できる範囲で様々な役割を担ってもらい、キリストのからだとして自分が教会に必要な存在だと気づいてもらうこと。中学に入ってから神様から離れることがないように、これらのことを切に祈り関わっています。月一回のファミリー礼拝では、ユースとユース担当の若い教師にバンド演奏、リードをらせてお



CS教師任命式

り、大変恵まれています。

熊本は、高校卒業後は県外に進学する子が多いところ
です。しかし、帰省するたび教師としてCSに関わって
くれていた大学生がおり、卒業後、熊本に戻り本格的に
活動してくれています。また、祈りつつ熊本に残る決心
をしたCS生徒たちが、今、一人、また一人と教師になっ
てくれています。

冒頭に述べた生徒は、ノンクリスチャンの家庭で、親
御さんの許可を得て受洗した子です。「CSの教師にな
らない？ 祈って、神様からのオファーだと確信持てた
ら、ぜひ」と筆者が声掛けをしたのですが、「やります」
と即答で涙。来年卒業する子にも「熊本にいるならぜひ」
と既に声掛けしたのですが、「え、もちろん」と言われ涙。
10代〜60代の頼もしいCS教師たちと共に、新しい魂の
獲得と、一人を愛することを、一層取り組んでいきたい
と思います。

(金田ゆり)



●イスラエルの指導者

10月1日
行事 テーマ
ギデオンの召命 士師 6・7・16
聖書
暗唱聖句

8日
サムソン 士師 16・15・22
同17節

●キリストの譬話 たとえ

10月15日
岩を土台とする生涯 マタイ 7・24・27
同24節

22日
四つの種 マタイ 13・18・23
同8節

29日
七回を七十倍するまで マタイ 18・21・35
同22節

●クリスマス

11月5日
婚宴への招き マタイ 22・1・14
同4節

12日
主の再臨に備える マタイ 25・1・13
同13節

19日
タラントを活かす マタイ 25・14・30
同21節

11月26日
収穫感謝 日々の糧を与える神 詩篇 145・8・16
同15節

12月3日
アドベント 預言 インマヌエル イザヤ 7・1・17
同14節

10日
救い主誕生の預言 イザヤ 9・1・7
同6節

17日
ヨセフへの告知 マタイ 1・18・25
同21節

24日
クリスマス 王なるキリストを迎える マタイ 2・1・12
同2節

●年末年始

12月31日
年末感謝 感謝の生活 コロサイ 3・15・17
同16節

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<https://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇二三年度Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は服部喜望教会の山下大喜師が執筆してくださいました。「牧羊ひろば」では熊本真愛教会のCSを紹介していただきました。教師養成講座はお休みしました。

※二〇二三年度第Ⅱ巻の表紙に間違いがありました。「追加」牧羊ひろば 郡山キリスト共同教会 申し訳ございません。お詫びして訂正いたします。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

メッセージ例	和田牧子師	後藤 真師	飯田勝彦師
聖書講解	土屋開夫師	今田雅子師	
研究資料	石田高保師	宮澤清志師	小泉 創師
	高橋頼男師	福井文彦師	
	宮澤清志師	中島啓一師	金井由嗣師
	小平徳行師	辻林和己師	
ワーク(A)	吉田美穂師	鎌野 幸師	宇野真佑美師
(B)	石川剛土師	三輪直子師	山下大喜師
(C)	野勢かほる師	竹崎光則師	
中高科へのヒント	田中裕明師	上森恭子師	八幡直人師
子ども聖書日課	石田高保師	後藤健一師	三輪正見師
フラッシュカード	田中愛子師	金田ゆり師	小野淳子師
	柴田福音師	後藤栄子師	丹羽 遥姉
	松浦あん姉		
み言葉カード・イラスト	柴田福音師	後藤栄子師	丹羽 遥姉
	松浦あん姉		
ワープロ打ち込み	後藤健一師		
校正	中島啓一師	後藤健一師	

また、事務作業・発送の教団事務所の光田隆代先生はじめ佐藤由香姉他姉妹方、組版の松木共榮印刷、印刷のプリントバックに心から感謝いたします。(後藤健一)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇二三年度 Ⅲ巻

二〇二三年十月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団
企画監修 日本イエス・キリスト教団・信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三三一九
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-1661
印刷所 株式会社プリントバック

* 聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会許諾番号4121750号